

松江市文化財調査報告書 第180集

アークタウン西持田敷地造成工事に伴う発掘調査報告書

柏木遺跡

平成29(2017)年8月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財团

アークタウン西持田敷地造成工事に伴う発掘調査報告書

柏木遺跡



平成29(2017)年8月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財团

例　　言

1. 本書は、平成 28～29 年度に実施したアークタウン西持田敷地造成工事に伴う柏木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、株式会社ライズアークから松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) 柏木遺跡
(調査地) 島根県松江市西持田町柏木 105-1 外

4. 現地調査の期間
平成 29 年 3 月 8 日～平成 29 年 4 月 24 日
5. 開発面積及び調査面積
事業面積：6,003.34m²
調査面積：246.5m² (A 区：143.3m²、B 区：103.2m²)

6. 調査組織

依頼者	株式会社 ライズアーク	代表取締役	山田 登
主体者	松江市教育委員会	教育長	清水 伸夫

【平成 28～29 年度】 現地調査及び報告書作成業務

調査指導	島根県教育庁 文化財課	主任主事	人見 麻生
事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	藤原 亮彦

〃 次長(まちづくり文化財課長兼務) 永島 真吾

〃 まちづくり文化財課

〃 専門官(埋蔵文化財調査室長兼務) 飯塚 康行

〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

〃 " " 主任 徳永 隆

〃 " " 学芸員 三宅 和子

〃 " " 曹託 門脇 誠也

実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	清水 伸夫
-----	----------------------	-----	-------

埋蔵文化財課 課長 曽田 健

〃 調査係 係長 川西 学

〃 " 調査員 廣瀬 貴子(担当者)

〃 " 調査補助員 門脇 祐介

7. 調査に携わった発掘作業員

岩成博美、金坂昇、佐伯規男、土江伸明、多久和登、福田純治、細木澄子、峰谷一雄

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。
金坂昇、須藤佳奈子
9. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教授、ご協力を頂いた。
記して謝意を表する。(順不同、敬称略)

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 教授 佐藤 信

島根県立古代文化センター 専門研究員 平石 充

〃 研究員 吉松 大志

島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター 調査第二課長 守岡 正司

島根県立松江北高等学校 教諭 大谷晃二

10. 本書の執筆は、第1章・第3章第1節を松江市埋蔵文化財調査室が、第2章・第3章第2節～第6章を廣瀬が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て廣瀬が行った。
11. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

[弥生土器]

松本岩雄 1992 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編』

[土師器]

松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相一大東式の再検討ー」『島根考古学会誌』第8集

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲國府跡－9 総括編－』

[須恵器]

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲國府跡－9 総括編－』

[中世土器]

廣江耕史 1992 「島根県における中世土器」『松江考古 第8号』松江考古学講話会

八幡興 1998 「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究XIII』日本中世土器研究会

[陶磁器]

太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』

[円筒埴輪]

川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学会誌』第64卷4号

12. 本書に掲載する土層は、『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修:財団法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。
13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。
14. 本書における遺構の略号は以下のとおりである。

NR : 自然流路

15. 本書で掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを明記した。遺物実測図の縮率は原則1/3とし、断面は土師器・陶器を白ヌキ、須恵器・磁器を黒塗り、木製品・鉄製品・石製品を網掛けで示した。また、木製品・円筒埴輪の縮率は1/4、黒曜石の縮率は1/2、錢貨の縮率は1/1としている。
16. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

目 次

例言

第1章 調査に至る経緯.....	1
第2章 位置と歴史的環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	2
第3章 調査の方法.....	6
第1節 試掘調査と調査範囲.....	6
第1項 試掘調査の概要と調査範囲の選定.....	6
第2項 試掘調査出土遺物.....	7
第2節 調査の方法.....	8
第4章 A区の調査.....	9
第1節 基本層序.....	10
第2節 遺物.....	11
第1項 4層.....	11
第2項 5・6層.....	13
第3項 7層.....	13
第4項 8層.....	16
第5項 NRO2上層(10層).....	16
第5章 B区の調査.....	17
第1節 基本層序.....	17
第2節 遺物.....	19
第1項 4層.....	19
第2項 5・6層.....	20
第3項 8層.....	20
第6章 総括.....	22
第1節 出土遺物の様相.....	22
第1項 A区.....	22
第2項 B区.....	22
第3項 土層毎の遺物の様相.....	23
第2節 遺物と周辺の様相.....	24
第3節 結語.....	25
遺物観察表.....	26
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図	開発範囲図	1
第 2 図	柏木遺跡周辺の微地形分類図	2
第 3 図	周辺の遺跡分布図	5
第 4 図	調査範囲図	6
第 5 図	試掘調査出土遺物実測図	7
第 6 図	調査区グリッド配置図	8
第 7 図	A 区全体図	9
第 8 図	A 区土層断面図	10
第 9 図	埴輪出土位置図	11
第 10 図	A 区 4 層出土遺物実測図	12
第 11 図	A 区 5・6 層出土遺物実測図	14
第 12 図	A 区 7 層出土遺物実測図	15
第 13 図	A 区 8 層出土遺物実測図	16
第 14 図	A 区 NRO2 上層（10 層）出土遺物実測図	16
第 15 図	B 区全体図	17
第 16 図	B 区土層断面図	18
第 17 図	B 区 4 層出土遺物実測図	19
第 18 図	B 区 5・6 層出土遺物実測図	20
第 19 図	B 区 8 層出土遺物実測図	21
第 20 図	A・B 区層位対応図	23
第 21 図	埴輪出土遺跡分布図	24

写真図版目次

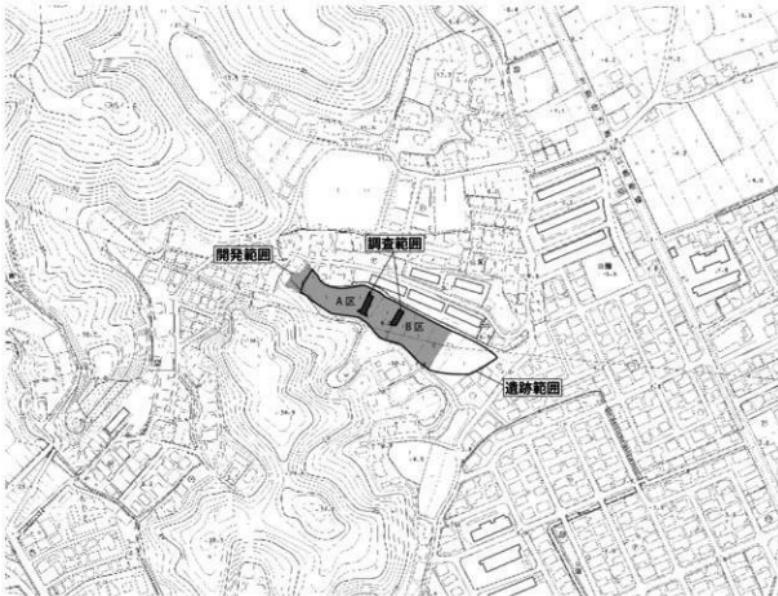
図 版 1	柏木遺跡調査前近景、A 区完掘状況（北東から）
図 版 2	A 区東壁土層断面（北西から）、A 区東壁土層断面 C-C'（北西から）、 A 区遺物出土状況（埴輪）
図 版 3	B 区完掘状況（南西から）、B 区サブトレ①・②土層断面（北西から）
図 版 4	試掘調査出土遺物
図 版 5	A 区 4 層出土遺物
図 版 6	A 区 5・6 層出土遺物
図 版 7	A 区 7 層出土遺物
図 版 8	A 区 7 層出土遺物（墨書き器）、A 区 8 層出土遺物、 A 区 NRO2 上層（10 層）出土遺物、B 区 4 層出土遺物
図 版 9	B 区 5・6 層出土遺物、B 区 8 層出土遺物①
図 版 10	B 区 8 層出土遺物②

第1章 調査に至る経緯

平成28年5月、当該地において宅地造成工事が計画されたことに伴い、事業者から埋蔵文化財の有無について松江市埋蔵文化財調査室に照会がなされた。当地については未調査地であり、周囲に遺跡も隣接することから、同年6月に試掘調査を実施した。その結果、広範囲に遺物包含層が存在することが確認されたが、遺物の密度に濃淡があったことから、工事計画が具体的になった10月に追加の試掘調査を実施し、遺物の分布範囲を確認した。結果、谷部中央の北東寄りに遺物が一定の量まとまって所在する区域が確認されたことから、この範囲を発掘調査を要する範囲と考え、隣接する柏木遺跡の範囲の広がりを確認したものと判断し、遺跡の範囲変更の手続きを行った。

その後、事業者と遺跡の保護について協議したが、大半が盛土による造成で遺跡に影響は及ばないものの、遺物が一定の量まとまって所在する区域において2箇所の進入道路を新設せざるを得ないと結論に至った。

以上の経過から、平成29年2月に文化財保護法第93条の規定に基づく発掘の届出が事業者から提出され、この内容について島根県教育委員会と遺跡の取り扱いについて協議したところ、この道路部分の発掘調査が必要であるとの指示を受けるに至り、平成29年3～4月の2か月間に渡り、発掘調査を実施することとなったものである。



第1図 開発範囲図 (S=15,000)

第2章 位置と歴史的環境

第1節 地理的環境（島根県・松江市位置図、第2図）

柏木遺跡は、島根県の東部、松江市市街地の北東側に位置し、松江市西持田町柏木105-1外に所在する。島根半島の北側の山地から派生する丘陵（以下、北山丘陵と記す）の裾部と裾部に挟まれた谷底にあたる。現況は田畠であり、北西側から南東側に傾斜している。

調査地の約600m南東には、島根半島の北側の山地を源とし、松江市街の東端を南下して宍道湖と中海をつなぐ大橋川へと注ぐ朝鈴川が南北方向に流れている。朝鈴川周辺には三角州の広がりが確認され、沖積低地である。以前は田畠が多くみられたが、現在は住宅地となっている。本遺跡と三角州の間には低湿地が広がっていたようだが、現在は住宅地となっている。

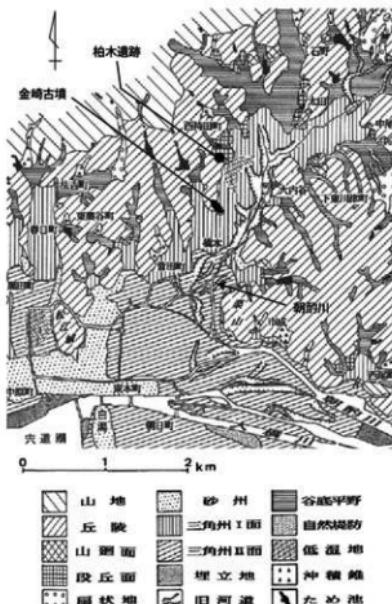
第2節 歴史的環境（第3図）

北山丘陵尾根上や縁辺部、朝鈴川周辺には多くの遺跡が確認されている。第2

節では、川津、持田地区から法吉地区にかけての遺跡を以下時代毎に述べる。

旧石器時代 西川津遺跡（24）、タテチョウ遺跡（26）で尖頭器や細石刃核が出土し、白鹿谷遺跡（73）では玉髓製插器が採集されており、遺構が存在する可能性がある。

縄文時代 縄文時代の遺構は確認されていないが、縄文土器が出土している遺跡では、西川津遺跡、タテチョウ遺跡、原の前遺跡（25）、島根大学構内遺跡（23）、金崎古墳群（19）、削上遺跡（35）、城ノ越遺跡（6）が挙げられる。島根大学構内遺跡の橋繩手地区からは、早期末から前期末にかけての土器や、前期の丸木舟、石器が出土している。西川津遺跡では、縄文時代早期の纖維土器のほか、前期、晚期の土器、石器が多く出土し、また、中期から後期にかけて朝鈴川河口推定付近に打たれた杭が多く確認されている。タテチョウ遺跡でも多くの遺物が出土している。西川津遺跡、原の前遺跡、島根大学構内遺跡の調査では、アカホヤ火山灰層が確認されているほか、縄文海進によって宍道湖が朝鈴川中流付近まで入り込んでいたことが分かっており、これらの遺跡は縄文時代を知る貴重な資料



* 林正久 1991「松江南辺の沖積平野の地形発達」『地理科学』第46巻第2号
より、図2：松江平野の微地形分類図を転載

第2図 柏木遺跡周辺の微地形分類図 (S=1:60,000)

となっている。他に、金崎古墳群と城ノ越遺跡からは後期と晩期の土器が採集され、劍上遺跡からも時期は不明であるが土器が出土している。

弥生時代 この時期の遺跡は、前述した西川津遺跡やタテチョウ遺跡、原の前遺跡のほか、貝崎遺跡(36)、橋本遺跡(28)がある。西川津遺跡では前期から中期の掘立柱建物跡などが検出され、前期から中期の土器や、木製品、石器が多く出土している。西川津遺跡のV区の調査では、流水紋銅鐸や人面付土器が発見され、鶴場地区の調査では、前期や後期の大溝(環濠)が見つかり、多くの弥生土器や、漆液容器、木製農耕具、土笛が出土していることから、拠点集落と考えられている。タテチョウ遺跡でも前期から後期の土器や木製品、石器が、貝崎遺跡や橋本遺跡でも土器や石器が採集されている。縄文時代の終わり頃には穴道湖の汀線が後退し、周囲が湿地帯となったことから農耕に適した場所となり、農耕の発達とともに多くの集落が存在するようになったものと思われる。

墳丘墓では、沢下遺跡(7)で6基検出され、このうちの2基が貼石を施した弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓である。他に、小丸山古墳群(65)では4基の方墳が確認されているが、そのうちの1基は、出土遺物から方墳以前の弥生時代後期の墳丘墓であると考えられ、現状では朝駒川流域における弥生時代の墓としては最古である。

古墳時代 北山山系から派生する低丘陵には多くの古墳が分布している。前期の古墳は少なく、朝駒川流域では、山崎古墳(30)の1号墳や菟捨古墳(34)、菅田ヶ丘古墳(21)が知られる。山崎1号墳は、埋葬施設に割竹形木棺が置かれていたと推測される方墳である。菟捨古墳は、楕円形を呈する円墳で、胞龍紋鏡の破鏡や振紋鏡、玉類、金属製品など多く出土している。折廻古墳群(39)は前期から中期の古墳で、礫床を伴う箱式石棺を主体部とする。前期の埋葬に関わるものでは、大佐遺跡(9)で墳墓群が確認され、そのなかの土器棺には搬入土器が使われていた。中期になると、丘陵に多くの古墳が築かれていいく。なかでも金崎古墳群は国指定の古墳群で、その1号墳は全長35mの前方後方墳である。倣製内行花文鏡、玉類、剣や矛などの武器、初期須恵器が出土し、朝駒川流域における首長墓と考えられている。他に、薬師山古墳(22)や大源古墳群(62)の1号墳、宮垣古墳群(13)の2号墳、柴古墳群(29)、馬込山古墳群(31)、上浜弓古墳群(16)、塚山古墳(53)がある。薬師山古墳は、金崎古墳と同時期の古墳で、仿製四乳鏡や刀身が出土している。塚山古墳は一辺33mの造り出しが付く方墳で、円筒埴輪や形象埴輪のほか、主体部から青銅鏡や玉類、鉄剣などが出土している。後期古墳では、横穴式石室をもつ太田古墳群(64)や岡田薬師古墳(42)がみられる。他に、出土遺物がなく時期を明確にできないが、深町古墳群(15)やJ69古墳(2)、福山古墳群(3)、杉谷古墳群(11)、J68古墳(4)、松ヶ峰古墳(40)が存在する。

横穴墓では、ひのさん横穴群(38)、栗元横穴(47)、深町横穴(14)、菅田横穴墓群(69)がある。ひのさん横穴群では20基の、菅田横穴墓群では22基の横穴が確認され、土師器や須恵器、大刀、人骨が出土している。

集落跡では堤廻遺跡(27)で、21棟の竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡が検出され、当該期の集落を知る資料となっている。他に、6世紀後半の焼成した須恵器片が多く採集された長谷窯跡推定地(45)があり、須恵器窯の存在が指摘されている。

古代（奈良時代・平安時代） 733（天平5）年に編纂された『出雲国風土記』によれば、当地域は嶋根郡に属し、郡家は山口郷に比定される。山口郷には3つの里があったと記されているが、その名前は不明である。本遺跡の南東から北東にかけての広い範囲には、持田川流域条里制遺跡（72）が存在していたが、現在は消滅している。建物跡では、下がり松遺跡（55）で、奈良・平安時代の掘立柱建物跡が検出され、谷部から墨書き器や硯が出土している。古屋敷II遺跡（33）では、平安時代後期の集落跡が確認されている。また、本遺跡北側に位置する祖母畠遺跡（5）からは、掘立柱建物跡や多数のピットが検出され、須恵器、土師器が出土している。明確な遺構の時期は不明であり、古墳時代まで遡る可能性も捨てきれないが、本遺跡に一番近い建物跡である。他に、原の前遺跡やタテチヨウ遺跡、田中谷遺跡（57）、角谷遺跡（56）でも古代の遺物が出土している。

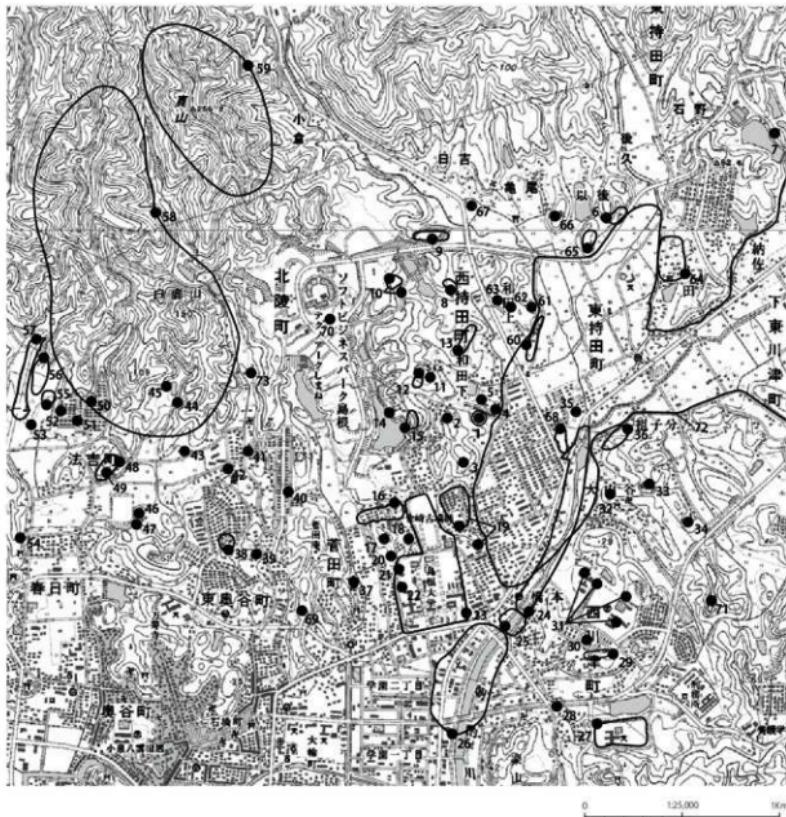
中世 中世の遺跡は、古墓や経塚が多い。二反田古墓（41）や馬込山古墓群のほか、下がり松遺跡で確認され、二反田古墓では石積みの基壇と茶毘跡が、下がり松遺跡でも基壇が検出されている。コゴメダカ山遺跡（44）では、宋銭や明銭、脇差が出土しており、古墓の可能性が指摘されている。経塚では、山槻経塚群（49）、石在経塚（54）が知られ、石在経塚では一字一石経が出土している。

建物跡では、西川津遺跡（D区）で多くの建物跡が確認され、周辺に集落が営まれていたことが確認されている。

山城では、白鹿山城砦跡群（58）や真山城跡（59）が所在する。白鹿城は尼子氏の家臣、松田氏の居城であり、「尼子十旗」のうちの第一の城とされていた。真山城は、毛利軍が白鹿城攻略のために陣を構えたところで、激しい戦の末、白鹿城は陥落している。しかし、この後真山城は尼子再興戦で尼子氏の拠点となるが、再び毛利氏の手に落ちている。藤ヶ谷遺跡（70）は白鹿山城砦跡群や真山城の南東に位置する遺跡である。郭や小口等が確認され、火縄銃の玉が出土している。他に、川津城跡（71）や堂頭山城跡（34）などの小規模な山城もあり、堀や郭が見つかっている。

【参考文献】

- 加藤義成 1981 『修訂出雲国風土記参究』
- 島根県教育委員会 1979～1992 『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書』I～IV
- 島根県教育委員会 1980～2003 『西川津遺跡発掘調査報告書』I～IX
- 島根県教育委員会 1986 『岡田薬師古墳』
- 島根県教育委員会 1995 『原の前遺跡』
- 島根県教育委員会 2002 『田中谷遺跡 瑞山古墳群 下がり松遺跡 角谷遺跡』
- 島根県教育委員会 2008 『恵谷古墳群・岩鼻古墳群・上講武殿山城跡・砥石遺跡・沢下遺跡・元宮遺跡』
- 島根県教育委員会 2011 『菊池古墳・西川津遺跡』
- 島根県教育委員会 2013 『西川津遺跡・古屋敷II遺跡』
- 島根大学法文学部考古学研究室 2000 『松江市手間古墳発掘調査報告書 菊師山古墳出土遺物について』
- 島根大学理蔵文化財調査研究センター 1994 『島根大学構内遺跡第1次調査(橋繩手地区1)』
- 新人物往来社 1980 『日本城郭体系14』
- 林久正 1991 『松江周辺の沖積平野の地形発達』『地理科学』第46卷第2号
- 松江市教育委員会 1978 『史跡金崎古墳群』
- 松江市教育委員会 1984 『山崎古墳』
- 松江市教育委員会 1986 『堤原遺跡』
- 松江市教育委員会 1987 『二反田古墓』
- 松江市教育委員会 1993 『上浜弓1号墳他発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 『大佐遺跡群発掘調査報告書』



- | | | |
|--------------|----------------|------------------|
| 1. 柏木遺跡 | 25. 原の前遺跡 | 49. 山林経塙群 |
| 2. 稲9古墳 | 26. タチヨウ遺跡 | 50. 下かり松1遺跡 |
| 3. 稲9古墳群 | 27. 便通古墳群 | 51. 伝田山加比北荒部御陵古墳 |
| 4. 鶴見古墳群 | 28. 金木古墳群 | 52. 春日山古墳群 |
| 5. 鶴見古墳群 | 29. 黄土古墳群 | 53. 塚ノ山古墳 |
| 6. 城ノ越遺跡 | 30. 山古山古墳 | 54. 石の経塙 |
| 7. 沢下遺跡 | 31. 馬山山古墳〔古墓〕群 | 55. 下なり松古墳跡 |
| 8. 国古石古墳群 | 32. 古那敷古墳 | 56. 角ノ谷遺跡 |
| 9. 大佐古墳 | 33. 古那敷II遺跡 | 57. 田中谷遺跡 |
| 10. 国石遺跡 | 34. 菊井古墳・室頭山城跡 | 58. 田代山城跡群 |
| 11. 杉谷古墳群 | 35. 別上古墳 | 59. 真山城跡 |
| 12. 三日月古墳群 | 36. 上古墳 | 60. 丹波山城跡 |
| 13. 宮宿古墳群 | 37. ドドト遺跡 | 61. 141遺跡 |
| 14. 深町古墳穴 | 38. オのさん横穴群 | 62. 大湯古墳群 |
| 15. 深町古墳群 | 39. 斎瀬古墳群 | 63. 尾山横穴群 |
| 16. 上浜弓古墳群 | 40. 松ヶ峯古墳 | 64. 大田古墳群 |
| 17. 滝弓古墳群 | 41. 仁坂田古墓 | 65. 小山山古墳群 |
| 18. 宮田古墳群 | 42. 同田古墳師古墳 | 66. 穂の前古墳群 |
| 19. 金崎古墳群 | 43. 仁坂田古墳 | 67. 米田遺跡 |
| 20. 豊田小丸山古墳 | 44. ココダカラ山遺跡 | 68. 鶴見遺跡 |
| 21. 金崎古墳群 | 45. 金崎古墳群 | 69. 鶴見横穴群 |
| 22. 美野山古墳 | 46. 壱元古墳 | 70. 藤ヶ谷遺跡 |
| 23. 畠相大字境内遺跡 | 47. 壱元窓穴 | 71. 川津城跡 |
| 24. 西川塗跡 | 48. 山橋古墳群 | 72. 持川川流域里制遺跡 |

第3図 周辺の遺跡分布図 (S=1:25,000)

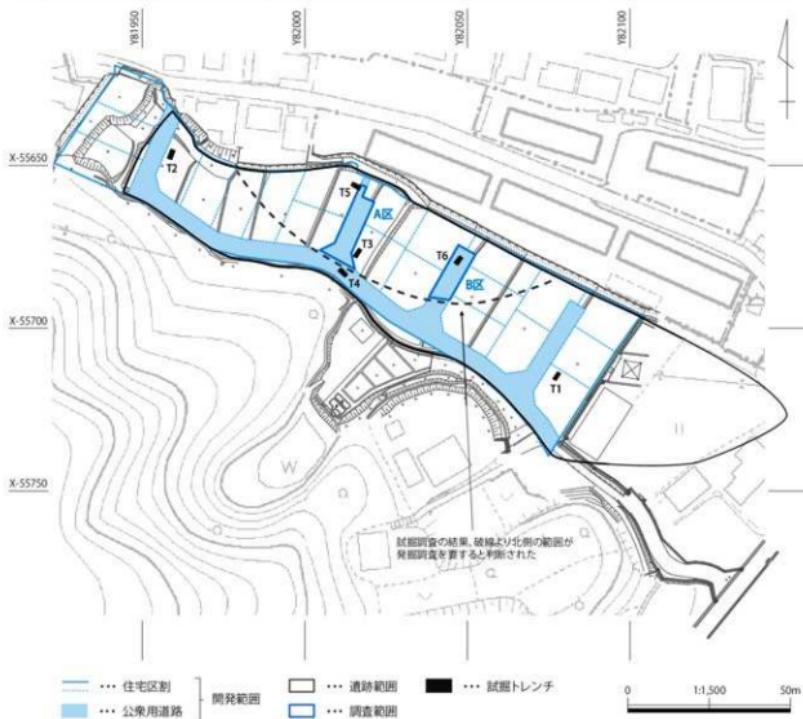
第3章 調査の方法

第1節 試掘調査と調査範囲（第4・5図）

第1項 試掘調査の概要と調査範囲の選定（第4図）

試掘調査は、平成28年6月（1次）と10月（2次）に、事業計画範囲において計6箇所で実施した。

まず、1次調査で、谷を縦断するように3箇所（T1～3トレンチ）の試掘調査を実施したところ、いずれのトレンチでも現況地盤から1m程度の深さで遺物包含層を確認した。このため、谷の下流部で既に周知されていた柏木遺跡が、事業区域内にも広がっているものと推定された。しかし、中央部のT3調査区を除いて、T1・2トレンチ及び旧来の柏木遺跡の範囲内では、摩滅した小片を含む希薄な遺物包含層しか検出されなかったことから、2次調査を実施し、遺物量がまとまって所在する範囲を確認することとした。その結果、南東の丘陵側に設定したT4トレンチでは、谷に向けて下る傾斜地になった地山が確認されたが、遺構は検出されず、遺物も摩滅した小片が1点出土した程度であつた。



第4図 調査範囲図 (S=1:1,500)

た。T5トレンチでは、谷自体が北東の丘陵寄りで徐々に深くなり、遺物包含層もその谷底に向かって厚く、遺物量が多くなる状況が確認された。南東側のT6トレンチでは、T5トレンチに比べて包含層も薄く、遺物も摩滅が進み、量も少なくなる状況が確認された。

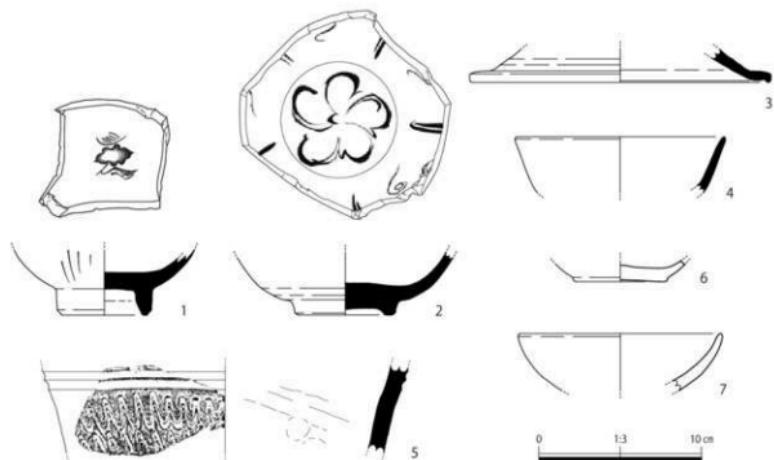
これらの結果から、当該遺跡は主に北側の丘陵から流れ込んだ遺物で構成される遺物包含層で、谷底部分に堆積したものと推察できた。よって、希薄な遺物包含層はほぼ事業区域内全域に確認されるものの、発掘調査を要すると判断される範囲は谷中央部の北寄りの範囲に限定されるものと判断した。

今回報告する本調査範囲は、この発掘調査をする範囲の中で、新設道路が2箇所計画されたことから、この北西側の道路範囲をA区（延長23.8m×幅6.0m）、南東側の道路範囲をB区（延長18.4m×幅6.0m）として実施したものである。

第2項 試掘調査出土遺物（第5図）

第5図は、試掘トレンチから出土した遺物である。

1は中国製の青磁碗である。豊付けから高台内は軸を描き取っている。外面に線彫りの蓮弁文、内面に印花文や線彫りの文様がみられる。15世紀後半から16世紀前半頃の所産である。2は龍泉窯系青磁の碗である。高台は断面四角で、高台内面の削りが浅く、底部は厚い。豊付けから高台内は無軸である。内面に劃花文が描かれ、大宰府陶器分類（以下、大宰府分類）では龍泉窯系青磁碗I-4b類であり、12世紀中頃から13世紀前半頃のものである⁽¹⁾。3～5は須恵器である。3は口縁端部がS字状となる蓋で、出雲国府編年第4～5型式⁽²⁾（以下、国府第○型式と記載）である。4は体部が直線的に立ち上がる壺で、国府第3～5型式と思われる。5は甕の口頭部である。推定で頭部最大径は22.4cmを測り、大甕であったと思われる。外面に波状文と沈線が施されている。6、7は土師器である。6



第5図 試掘調査出土遺物実測図 (S=1:3)

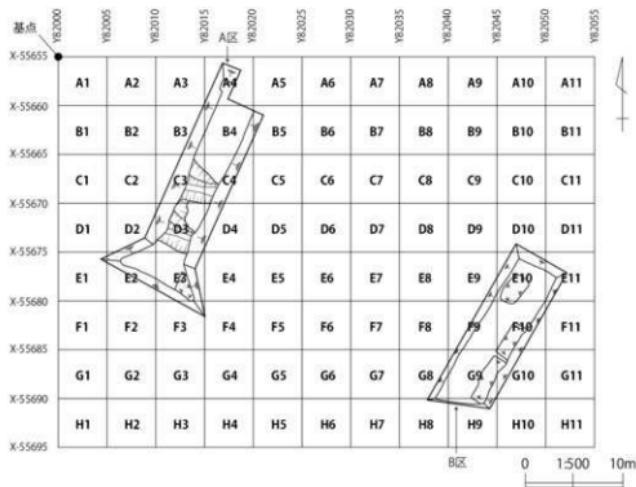
は底径が小さく、「ハ」の字状に開く皿の底部と思われる。古代後半頃の所産と思われる。7は、壺部が半球形を呈するものである。古墳時代中期頃のものと思われる。

第2節 調査の方法(第6図)

本調査開始前には、旧表土上に約1mの厚みで橙色の盛土が施されていた。最初に、2箇所の調査区の設定を行い、谷奥側の調査区をA区、谷手前側の調査区をB区とした。その後、重機によって盛土や遺物包含層までの旧表土や耕作土の掘削を行った。A区から調査を開始し、最初に調査区北側と南側に部分的に深掘りを行い土層観察を行った。遺構は検出されなかったが、遺物包含層を約1.1mの厚みで確認し、調査を実施した。次に、B区についても最初に土層観察を行い、無遺物層まで調査を実施した。B区では無遺物層の面で地山が確認されなかったことから、調査区南東壁際にサブトレ①、②を掘削し、地山の確認を行っている。

また、調査に当たり、調査区を国土座標に当てはめ、X=55655とY=82000の交点を基点とした5mメッシュのグリッドを設定した。グリッド名は、基点より南へ向かってA・B・C…、東へ向かって1・2・3…と、アルファベットとアラビア数字をそれぞれ振り分け、その組み合わせで呼称した(第6図参照)。遺物の採取は、このグリッド毎に行っている。

実測は、平面図やコンタ測量はトータルステーションを用い、土層断面についてはレベルを用いて手作業で測量を行った。図面の方位は世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、土色の注記は新版標準土色帖を使用している。写真については、フィルムカメラによる35mmのモノクロ、35mmのリバーサル、デジタル一眼レフカメラを主に使用し、120mmスライドフィルムカメラ、フルサイズのデジタルカメラで撮影を行っている。

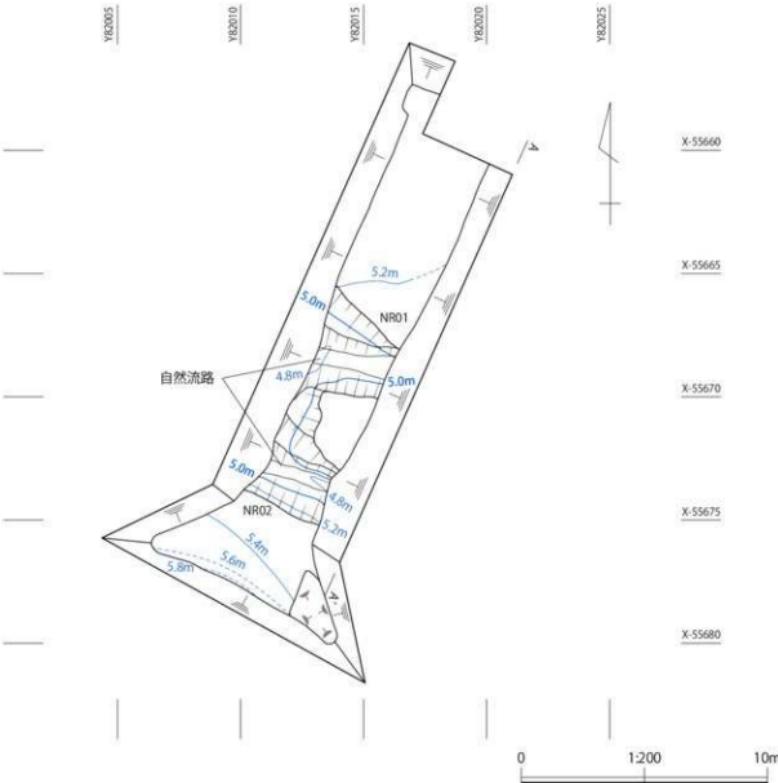


第6図 調査区グリッド配置図 (S=1:500)

第4章 A区の調査

A区は、開発範囲の中央に位置する袋小路の住宅内道路である。南北に長く、丘陵と丘陵の谷底を横断するような調査区である。調査区は、南北の長さが西側で23.8m、東側で21.0m、幅は中央で6.0m、南端で12.0m、北端で2.5mを測り、調査面積は143.3m²である。現地表面下2.5m～3.0mで地山面に至り、標高は5.2～5.3mを測る。調査区中央から南側の地山面で、東西方向に流れる2本の自然流路(NR01、02)を検出している。自然流路以外遺構を確認していないため、ここでNR01、02について触れておく。NR01は現況で長さ3.0m、幅2.2～5.0m、深さ20～35cm、NR02は長さ3.0m、幅2.4～3.4m、深さ50cmを測る。底面標高は数センチの高低差しかないのだが、地形からみて北西から南東に流れていたものと考えられる。新旧関係は不明である。

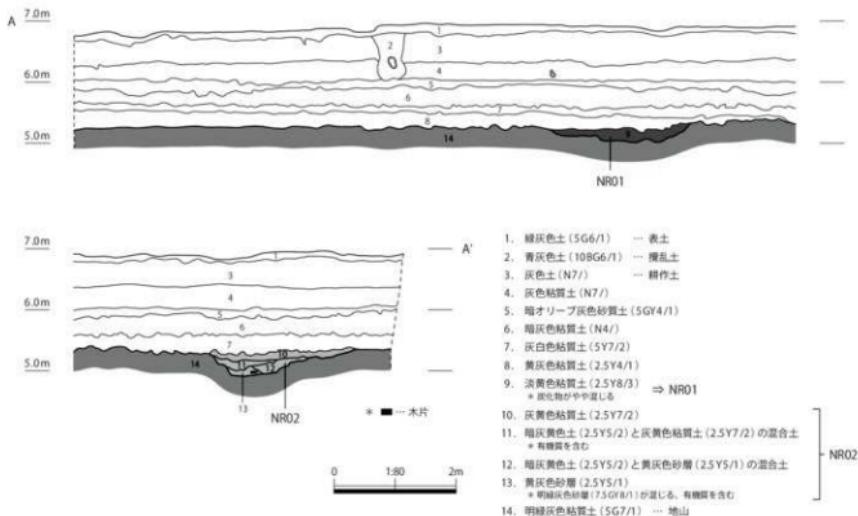
以下、基本層序について詳細を述べる。



第7図 A区全体図 (S=1:200)

第1節 基本層序（第8図）

現地表面標高は7.9～8.0mを測り、旧地表面標高は約6.9mである。表土や耕作土（1、3層）を重機で掘削し、旧地表面下0.6～0.8mで遺物包含層を確認している。2層は、暗渠の埋土である。4層（灰色粘質土）は、厚さ30～40cmでほぼ水平に堆積した土層である。土師器、須恵器、瓦質土器、中世陶磁器が出土している。中世陶磁器は、本調査では中世前半頃のものしか出土していないが、試掘調査において、中世後半の青磁碗が出土しており、中世後半以降の包含層と思われる。5層（暗オリーブ灰色砂質土）は、砂粒をやや含む土層である。砂粒は北側で多く、南側で少ない傾向にあり、水の流れが影響していると思われる。6層（暗灰色粘質土）は、30～40cmの厚さで水平に堆積した土層である。5、6層の遺物は一括で取り上げ、土師器、須恵器、中世陶磁器、弥生土器、木製品、錢貨、円筒埴輪が出土し、須恵器のなかには墨書き土器が1点みられた。出土遺物から中世前半以降の遺物包含層と思われる。7層（灰白色粘質土）は粘性が高い土層で、土師器、須恵器、弥生土器、円筒埴輪、鉄製品が出土し、土師器の下限の時期から古代末以降の包含層と考えられる。8層（黄灰色粘質土）は、黒色味を帯びた土層である。有機質が分解され黒色の色味のみが残っているように見える。8層は北側で水平に堆積しているが、調査区中央よりやや南側で確認されず、人為的な削平または自然流失の可能性が考えられる。遺物は土師器、弥生土器、石製品が出土し、須恵器がみられないことから古墳時代中期以前の遺物包含層である。5～8層は水平に堆積することや上面が凹凸していることから、畦畔などの遺構は検出されていないものの、耕作による影響を受けているものと推測される。9層は、NR01の埋土である。炭化物がやや混じり、底面に細砂粒が確認される。10～13層は、



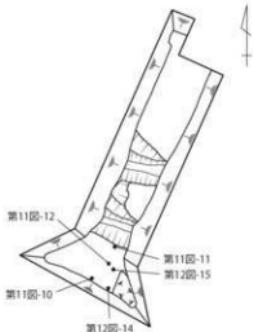
第8図 A区土層断面図 (S=1:80)

NR02の埋土である。10層は粘質土、11、12層は有機質を多く含み、分解が進んでいない土層である。13層は、砂層に地山土層が混じった土層である。遺物は10層から土師器の高杯が出土し、須恵器がみられないことから古墳時代中期以前の包含層と考えられるが、上層からの流れ込みの可能性も考えられる。地山は、自然流路以外、北側から南側にかけてほぼ平坦であるが、南西端でやや上方へ傾斜していく。これは調査区南西側から続く丘陵裾部と思われる。

第2節 遺物（第9図）

A区の遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、円筒埴輪、瓦質土器、中世陶磁器、木製品、石製品、鉄製品で、須恵器のなかに墨書き土器が1点出土している。遺物の出土状況をみると、調査区中央より北東側、B4、C3～C4区で多く、南西側で少ない。しかし、円筒埴輪6点はすべてE3区から出土していることから、周辺の古墳からの流れ込みの可能性が指摘される。特に、調査区南西側に位置するJ69古墳との関連が窺われる。

以下、遺物包含層の上層から下層の順で遺物について述べる。

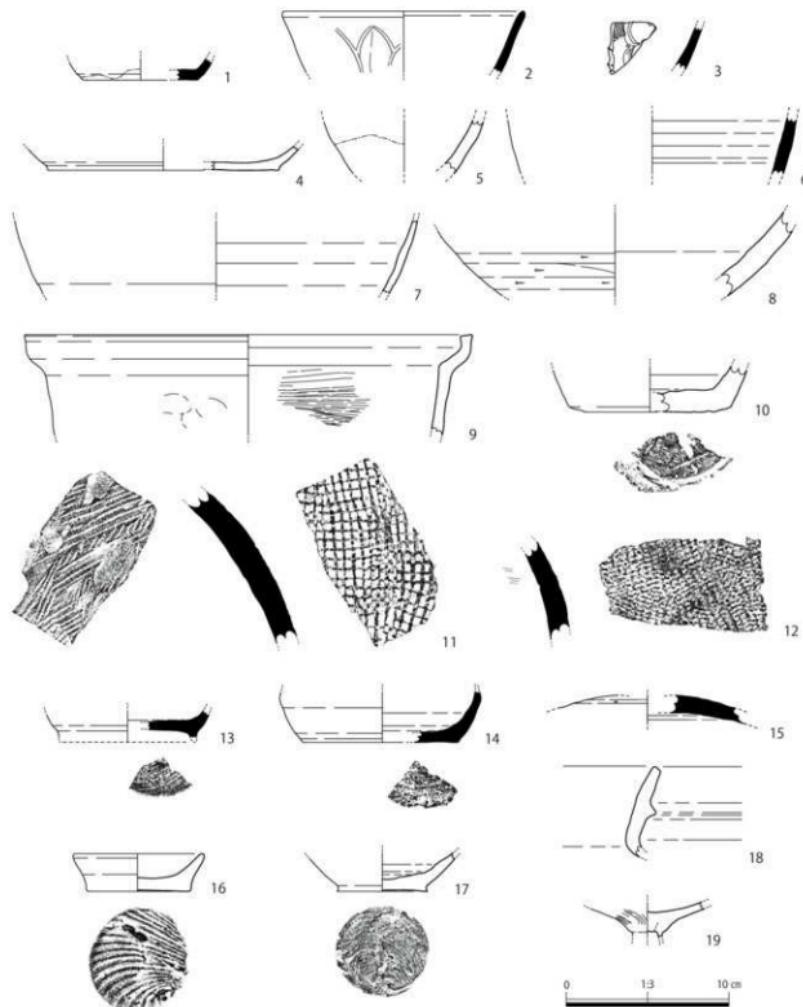


第9図 塩輪出土位置図

第1項 4層（第10図）

1～7は中国製の陶磁器であるが、5の天目茶碗は瀬戸焼の可能性もあることを示唆しておく。1は、白磁の口禿げ皿の底部である。平底を呈し、底部外縁の釉を掻き取っている。大宰府分類皿IX類に属し、時期は13世紀後半から14世紀前半である。2は龍泉窯系青磁碗である。外縁には弁の中心線に稜をなす鎬蓮弁文がみられる。釉が剥がれており、火を受けた可能性が考えられる。大宰府分類龍泉窯系青磁碗II-b類で、時期は13世紀前後から前半である。3は青白磁の破片で、内縁に櫛描文が描かれている。4は盤の底部である。底部の厚みは薄く、外縁は露胎、内縁に緑味灰黄色の釉が掛かる。大宰府分類盤I類に属し、中世前半頃と思われる。5は天目茶碗である。外縁上半と内縁に天目釉が掛かる。6は、白磁の水注または壺の胴部片である。7は壺の胴部片で、内外縁共に釉が掛かっていたものと思われるが、剥げている。8はこね鉢の体部下半で、外縁に明瞭なヘラケズリがみられる。産地は不明である。9は瓦質土器の鍋である。口縁部は内湾し、受け口状を呈する。外縁には指押さえの痕跡が、内縁には明瞭なヨコハケ目がみられる。10は、暗赤褐色を呈する壺の底部で、瓷器系陶器か須恵器か判断できない。11、12は中世須恵器で、外縁に格子状の叩き痕が認められる甕片である。11は暗灰色を呈し、焼成は硬く、内縁に明瞭なハケ目がみられる。1～12の遺物の時期は、中世前半と捉えている。13～15は古代の須恵器である。13は高台付环、14は無高台の环である。前者は国府第3～5型式、後者は第2～5型式と思われる。15は蓋の天井部である。外縁に回転ヘラケズリ、内縁に回転ナデ、静止ナデが施されている。詳細な時期はわからないが、宝珠つまみ

が付くような蓋で8世紀代頃のものと思われる。16～19は土師器である。16の皿は口縁部の立ち上がりが短く、底部に厚みがあるものである。17は环部が「ハ」の字状に開く环の底部で、16、17は中世前半と思われる。18は複合口縁の壺、19は高环で、环部と脚部の接続部に粘土を円盤充填している。18、19は古墳時代前期の所産と思われる。



第10図 A区4層出土遺物実測図 (S=1:3)

第2項 5・6層（第11図）

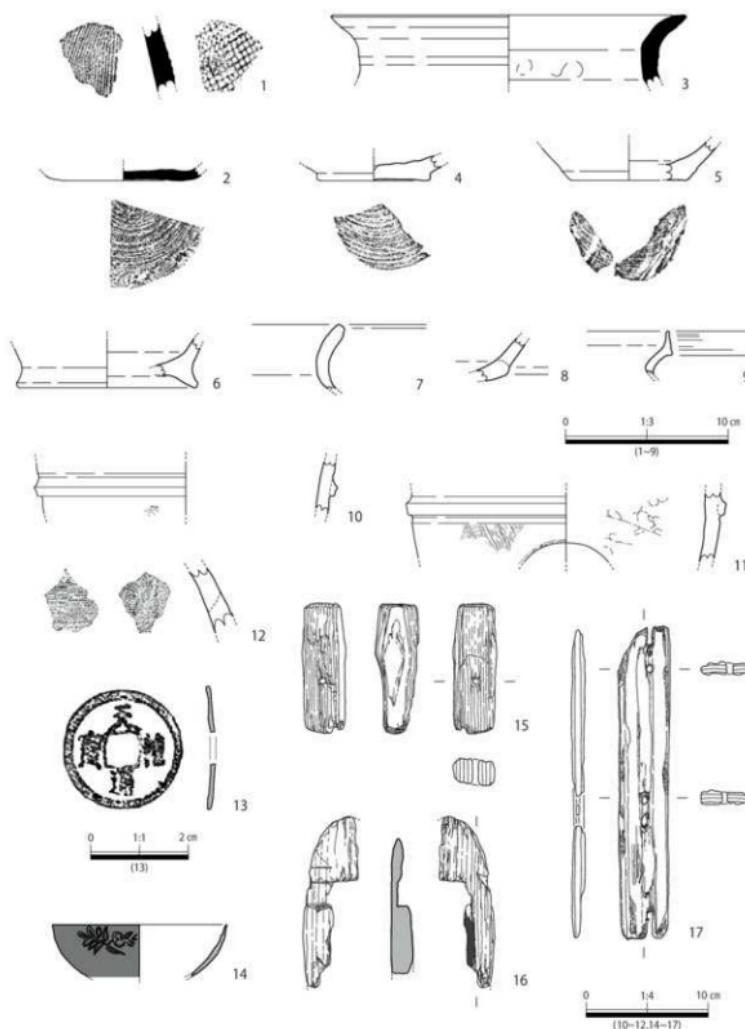
5、6層の遺物は、一括で取り上げているが、土層の厚さに比例して6層に多く、5層には少ない。掲載した遺物の他に、青磁、瓦質土器の細片が出土している。また、木製品はこの土層のみで確認され、B4、C4区から多く出土している。

1は中世須恵器の甕片である。内面にハケ目、外面に格子状の叩きが施され、焼成はあまく、黄橙色を呈している。2は須恵器の無高台皿の底部で、外面に回転糸切痕が認められる。国府第3～5型式。3は、須恵器の甕の口縁部である。4～8は土師器である。4、5は無高台坏の底部で、外面に回転糸切痕がみられる。国府第6～9型式と思われる。6は高台付坏で、国府第6～7型式である。7は古墳時代後期の甕の口縁部、8は高坏の坏部で、前期から中期と思われる。9は、弥生土器の甕の口縁部である。口縁部外面に擬四線文をめぐらし、V-2様式である。10～11は円筒埴輪の胴部片である。10は、復元最大径24.8cmを測る破片で、タガは低い。外面に縱や斜め方向のハケ目がみられ、内面にはナデが施されている。色調は浅黄橙色を呈する。11は、復元最大径26.2cmを測る破片で、下方に透孔がみられる。タガは低く、外面に斜め方向のハケ目を施し、内面に強いナデと指頭圧痕が認められる。色調は浅黄橙色である。12は、朝顔型埴輪の肩部と思われる。外面に横ハケ目を施し、内面は撫でている。破片の最下部はタガが剥がれた跡と思われる。10～11は川西編年のV期初頭（TK43～47併行期）に相当し、5世紀末から6世紀前半と捉えられる。13は北宋錢、「天禧通寶」で、初鋳造年は1017年である。14～17は木製品である。14は漆椀で、内外面ともに黒色を呈し、外面に草花文が描かれている。15は、長さ10.6cm、最大幅3.5cmを測る木片で、片側のみを扁平状に加工し、中央付近に円孔が穿たれている。用途は不明である。16は丸型差込下駄で、一部に焼けた痕跡がみられる。17は、長さ25.5cm、幅4.2cm、厚さ1.2cmを測る板状の不明木製品である。5箇所の孔が確認される。

第3項 7層（第12図）

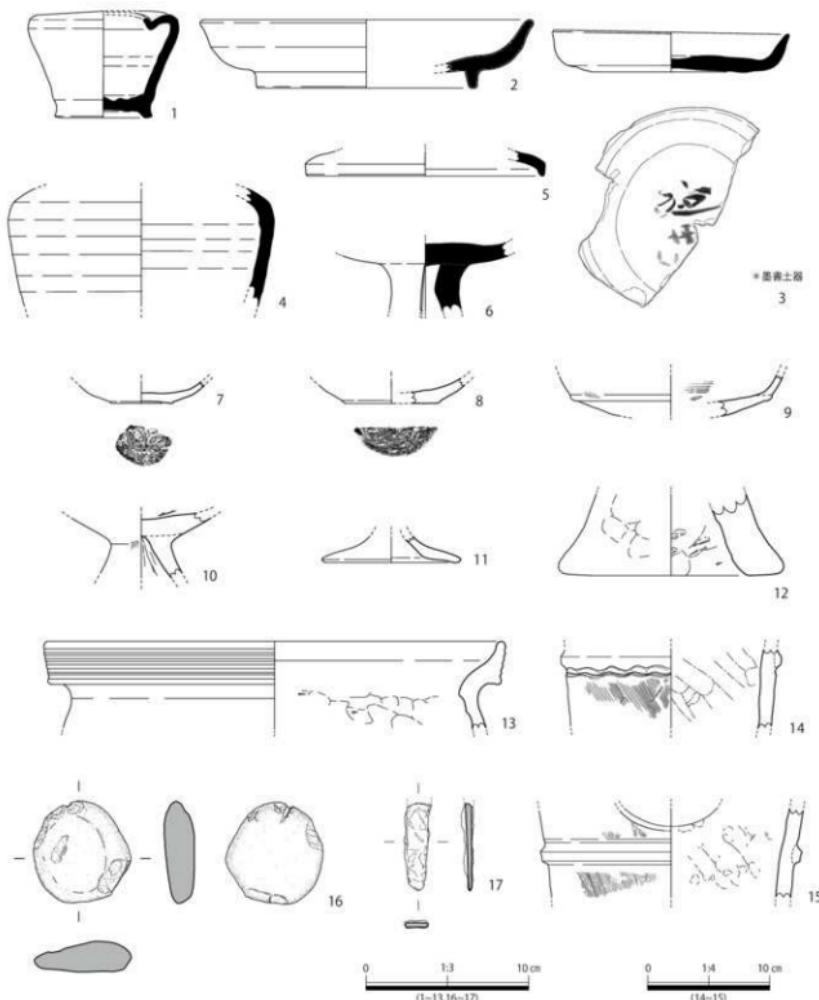
1～6は須恵器である。1は小型の短頸壺で、底径5.2cm、器高6.3cmを測る。焼成時に口縁部が内側に落ち込み変形している。2は、口縁部が外反する高台付皿である。国府第4～5型式。3は無高台の皿で、国府第3～5型式である。底部外面に墨書きがみられ、2文字あるようと思われる。敢えて読めば、一方は「塩」、もう一方は「什」の可能性を指摘いただいた。^{〔2〕}4は長頸壺の頸部、5は国府第2型式の蓋の端部である。6は、脚部に切れ目状の透かしがみられる高坏である。古墳時代終末頃のものと思われる。7～12は土師器である。7、8は皿の底部で、外面に回転糸切痕がみられる。国府第8～9型式と思われる。9～11は高坏である。9は、口縁部と坏部の境に段を持つもので、内外面にハケ目がみられる。10は坏部から脚部である。外面にハケ目、内面に絞り痕が認められる。11は脚部である。いずれも古墳時代前期から中期と思われる。12は土製支脚の脚端部である。13は弥生土器である。口縁部外面に擬四線文が施され、頸部内面にヘラケズリと指頭圧痕が認められる。V-2様式である。14、15は円筒埴輪の胴部片である。14は、復元最大径18.0cmを測り、色調は浅黄橙色を呈する。外面に斜め方向のハケ目が施され、内面に右下から左上方向へ強いナデがみられる。

タガは低く、下面が凸凹していることから、タガを貼り付けた後に指を粘土に押し付け、右から左方向に連続して撫でている。次にタガの上面を撫で、最後に平坦面を板状工具で押さえている。タガの下面をきれいに調整していないのは、埴輪の最下段に近い部分であり、土中に埋まることを想定し製



第11図 A区 5・6層出土遺物実測図 (S=1:1,1:3,1:4)

作しているものと考えられる。川西編年のV期初頭に相当し、5世紀末から6世紀前半と捉えられる。15は透孔をもつ破片で、色調はにぶい黄橙色を呈する。復元最大径21.6cmを測る。外面には斜め方向のハケ目が施され、内面は強いナデや指頭圧痕が認められる。タガは低く、上面は丁寧なナデを施し、平坦面を板状工具で押さえている。タガの下方には粘土紐を貼り付けた痕跡が明瞭にみられる。

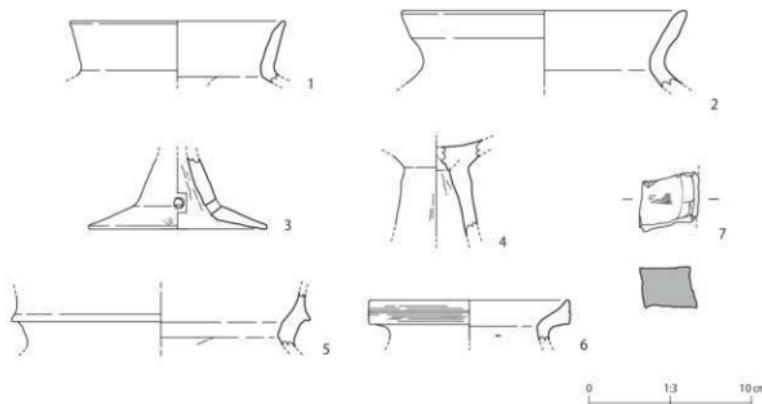


第12図 A区7層出土遺物実測図 (S=1:3,1:4)

14と同時期である。16は石錘である。上側に加工痕がみられ、下側は擦ったことによりやや凹み、滑らかである。17は鉄製品で、茎と思われる。

第4項 8層(第13図)

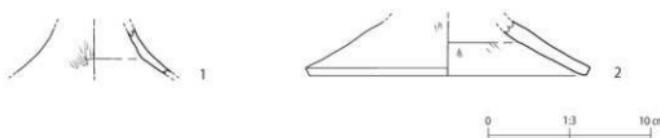
1～4は土師器である。1は単純口縁の甕で、口縁部がやや外反する。2は、痕跡的に複合口縁を残す甕である。いずれも古墳時代中期頃と思われる。3、4は高坏である。3の脚部には円形の透かし孔があり、外面にハケ目、内面に絞り痕がみられる。4は坏部から脚部で、接合部に粘土を充填している。古墳時代前期から中期と思われる。5、6は弥生土器である。5は複合口縁の甕で、V-4様式頃と思われる。6は甕の口縁端部で、擬凹線文が施され、V-1様式と思われる。7は砥石である。長さ3cm程の破片で、上面に擦痕が認められる。



第13図 A区8層出土遺物実測図(S=1:3)

第5項 NR02上層(10層)(第14図)

1、2は土師器で高坏の脚部である。1の外面や、2の内外面にハケ目がみられる。古墳時代前期から中期頃と思われる。

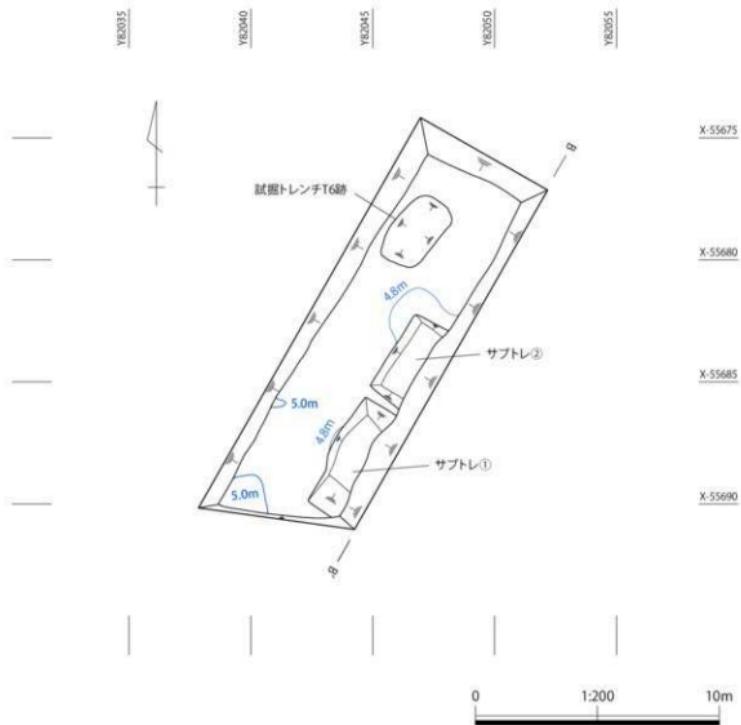


第14図 A区NR02上層(10層)出土遺物実測図(S=1:3)

第5章 B区の調査

B区は、開発範囲の中央よりやや南東側に位置する袋小路内道路の調査区である。東西6.0m、南北は西側で18.5m、東側で16.0mを測り、調査面積は103.2m²である。現地表面下1.5～1.7m下で遺物包含層を確認し、調査を行った。遺物包含層の調査後、調査区南東隅に地山確認のサブトレーン①、②の掘削を行い、土層断面から7本の自然流路（NR03～09）の痕跡が確認された。サブトレーン①、②から遺物は出土していない。

以下、層序について述べる。

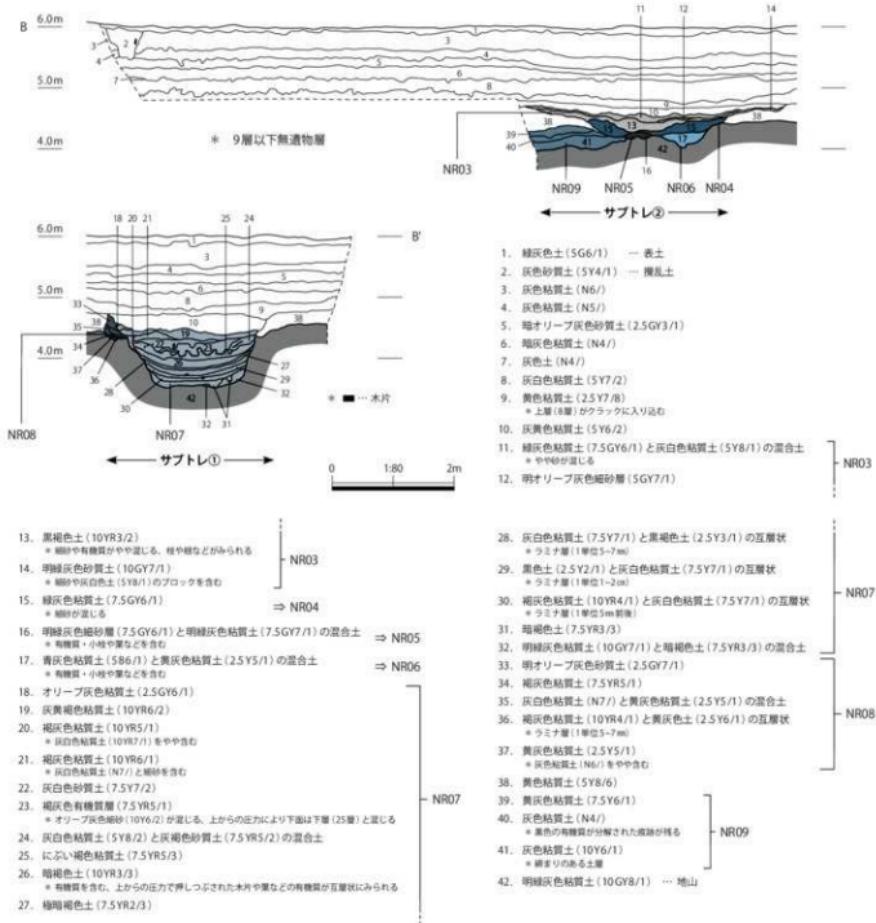


第15図 B区全体図 (S=1:200)

第1節 基本層序 (第16図)

現地表面標高は7.0～7.1mを測り、旧地表面標高は約6.0mである。第1層は表土、3層は現代の耕作土である。4層（灰色粘質土）は、10～20cmの厚さでほぼ水平に堆積し、3層とよく似た土質

であることから、耕作土と思われる。遺物は少ないが、中世前半の土器が出土していることから、中世前半以降の包含層と思われる。5層は、暗オリーブ灰色砂質土である。砂をやや含み、北側で砂が多く混在していた。6層（暗灰色粘質土）は、4層より黒味をおびた土層で、水平に堆積しているが、南西側にいくほど厚さが薄くなっている。5、6層の遺物は一括で取り上げ、須恵器や土師器、陶磁器、瓦質土器などが出土している。土師器は細片であり、時期や器種は判断できなかった。古墳時代から中世前半頃の遺物が出土し、中世前半以降の包含層である。8層（灰白色粘質土）は、粘性の高



第16図 B区土層断面図 (S=1:80)

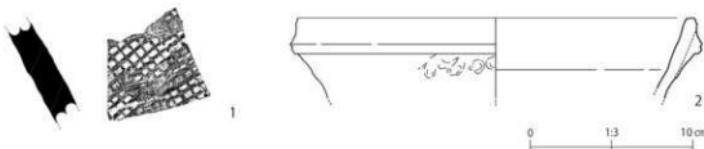
い土層で、きめが細かく、水の影響を受けながらゆっくり堆積したものである。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、石製品が出土し、須恵器の時期から古代、9世紀以降の包含層と思われる。5、6、8層の上面は凸凹、また土層が水平に堆積していることから、畦畔などの遺構は確認していないが、耕作による影響を受けている可能性が高い。9層（黄色粘質土）以下は無遺物層である。10層は、後述する NR03、07の上面で確認され、自然流路埋没後の凹地に堆積した土層と思われる。11～14層は、NR03の埋土である。NR04の埋土、15層を切り、上層に粘質土が、下層に有機質を含む土層や砂質土が堆積している。16、17層は、15層より下の土層である。この2層は NR04以前の堆積土であり、16層は NR05の、17層は NR06の堆積土としているが、NR04の一部の可能性も考えられる。18～32層は、NR07の埋土である。上層（19～21層）には褐色系の粘質土が、中層（22～26層）には暗褐色系の有機質を含む土層が、下層（27～32層）にはラミナ層や粘質土がみられる。中層の有機質は未分解であり、特に22、23層は、葉や小枝が大半を占めている。また、これらの土層には、上または横からの圧を受け、上層が波板状に変形しているのが確認される。下層はラミナ層を主体とする土層である。ひとつのラミナの単位は幅0.5～2cm程度を測り、約25cmの厚さでレンズ状に確認される。本来ラミナ層は湿地において水平に堆積することから、おそらく水平に堆積していたラミナ層が、上からの何らかの圧によりレンズ状に落ち込んだものと推測される。22、23層も土層の状況から、ラミナ土層と同時に落ち込んだと考えられる。33～37層は NR08の堆積土で、NR07に切られている。38層は NR03～08の基盤層であり、39～41層は NR09の堆積土である。39層は黄灰色の粘質土、40、41層は黒色を帯びた灰色粘質土で、粘性が強く、きめが細かい。40、41層は、有機質の分解が進み、黒色の色味だけが残ったような状況である。

このように、無遺物層の堆積状況をみると、地山面を削るように自然流路の形成、埋没が繰り返されていたことや水性堆積が観察され、B区が緩やかな緩斜面で、水の影響を受けやすいところであつたことが窺われる。

第2節 遺物

第1項 4層（第17図）

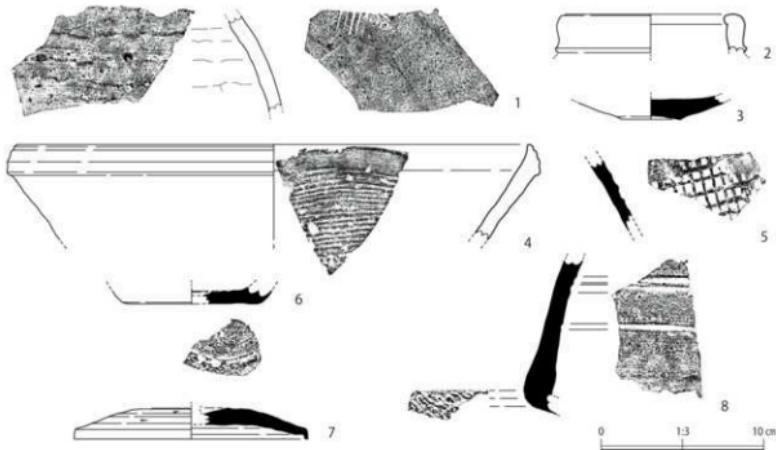
土師器、須恵器が出土しているが、遺物量は少なく、実測できたものは2点である。1は中世須恵器で、暗灰色を呈する斐片である。外面に格子状の叩き痕、内面にナデが認められる。2は銅か鉢と思われる。土師質で黄橙色を呈し、外面に炭化物が付着している。内面にナデ、外面にはナデと指揮さえを施している。いずれも中世前半に位置付けられる。



第17図 B区4層出土遺物実測図 (S=1:3)

第2項 5・6層（第18図）

1、2は陶器である。1は、瓷器系陶器の壺、甕類の胴部片で、暗褐色を呈する。内面には明瞭に粘土の繋ぎ目が確認され、強いナデをしている。外面には一部に叩き痕が認められるが、それ以外は丁寧なナデを施している。13～14世紀頃と思われる。2は、褐釉陶器、壺の口縁部である。直線的に立ち上がり、端部内面がわずかに屈曲している。中世前半頃と思われるが、明確な時期は不明である。3は龍泉窯系青磁の皿である。底部外面の釉を焼成前に掻き取っている。大宰府分類の龍泉窯系青磁皿1類に属し、12世紀中頃から後半頃のものである。4は瓦質の鉢である。内面には明瞭な横方向のハケ目、外面にナデを施している。5は、外面に格子状の叩き痕がある甕片である。内外面共に色調は灰色を呈しているが、やや焼きが悪い。4、5は中世前半である。6～8は須恵器である。6は無高台环の底部で、外面に回転糸切痕が認められる。国府第3～5型式。7は、口縁端部がやや屈曲する蓋で、国府第3～4型式である。8は甕の口縁部である。外面に沈線と波状文が施され、古墳時代後半から古代前半の所産と考えられる。

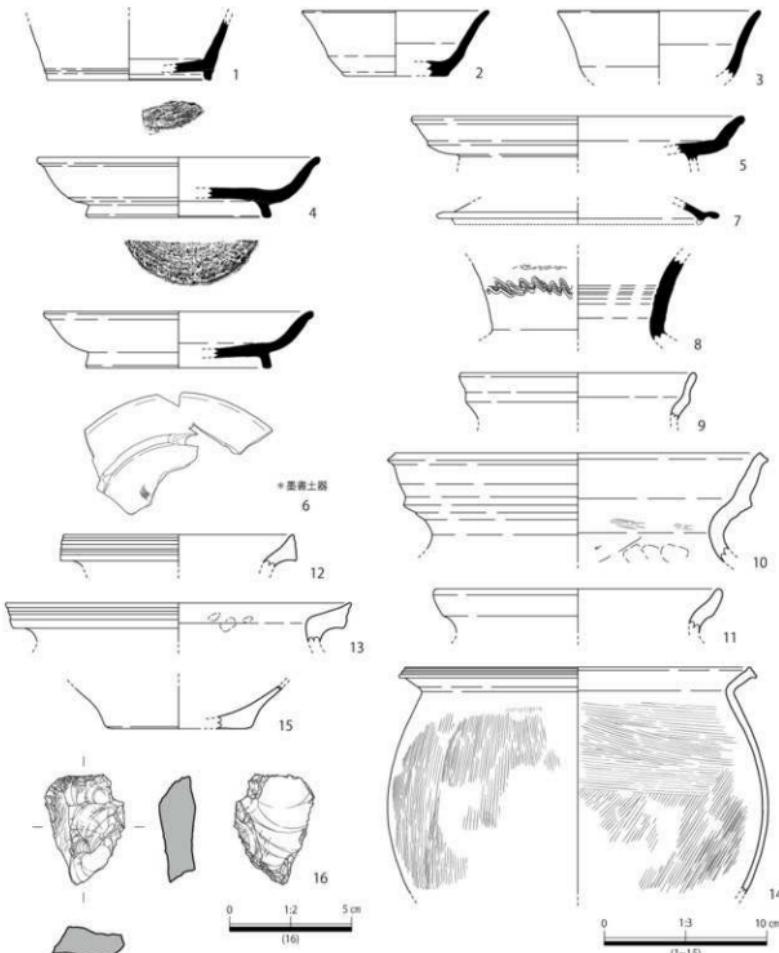


第18図 B区5・6層出土遺物実測図 (S=1:3)

第3項 8層（第19図）

1～8は須恵器である。1は高台付环で、低い高台を底部外縁に取り付けている。体部と高台が直線的であり、国府編年第6～7型式と思われる。2は無高台环である。体部は外傾し、国府第5～6型式である。3は、2と同時期の环である。4～6は高台环皿である。4は口縁部が外反し、内外面に回転ナデ、底部外面に回転糸切りを施している。5も4と同じ口縁部を呈する皿であるが、口径がやや大きい。6は、完形の1/4程度の残存であり、底部外面にわずかに墨書き痕がみられる。また、底部内面は滑らかであり、硯として使用された可能性が考えられる。7は、口縁端部内側にかえりがつく蓋である。国府編年第1型式である。8は甕の口縁部で、外面に波状文が描かれている。9、10は、土

師器、複合口縁の甕である。9は口縁部の稜が退化し、古墳時代中期と思われる。10は器壁が厚く、口縁端部を外方に肥厚させている。口縁部の内外面にヨコナデ、頸部内面にハケ目とヘラケズリ、指頭圧痕がみられる。古墳時代前期である。11～14は弥生土器の甕である。11の口縁部外面は無文で器壁がやや厚い。V-2様式かと思われる。12、13は口縁部外面に擬凹線文を施し、V-1様式である。14は器壁は薄く、口縁部外面に凹線文を施し、胴部内外面にハケ調整をおこなっている。IV-2様式と思われる。15は弥生土器の底部である。16は黒曜石の石核である。



第19図 B区8層出土遺物実測図 (S=1:2,1:3)

第6章 総括

柏木遺跡では、遺物包含層の調査を実施し、また、本調査区が位置する谷底地形の古環境の一端を垣間見ることができた。ここでは出土遺物について層位毎に述べ、本調査区の様相に触れてみたい。

第1節 出土遺物の様相

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、中世陶磁器、円筒埴輪、鉄製品、石製品、木製品である。本書で掲載した遺物の他に、図化できなかった土師器片、須恵器片も多くみられた。以下、各区の遺物について包含層毎に述べる。

第1項 A区

4層 4層からは、土師器、須恵器、瓦質土器、中世陶磁器が出土している。数量では、須恵器や土師器が多いが、中世陶磁器はA、B区のなかで一番多く出土している。陶磁器のほか、中世須恵器の甕片など前半期のものが多く、中世後半の青白磁碗もみられた。須恵器や土師器では、古代の壺や皿のほか、古墳時代前期から中期の甕片など、数量は少ないが出土している。4層は、中世後半以降の包含層と考えられる。

5、6層 5、6層からは、土師器、須恵器、弥生土器、円筒埴輪、銭貨、木製品が出土している。5、6層の遺物は一括で取り上げ、5層から出土したものは少ない。4層に比べると中世前半の遺物は少なく、中世須恵器の甕片や瓦質土器、青磁の細片がみられる程度である。数量では、古代の土師器や須恵器が多く、古墳時代の甕や高壺、円筒埴輪も出土している。円筒埴輪は、A区のE3区のみで出土し、時期も同じである。他には、弥生時代後期の甕が1点出土している。出土遺物から中世前半以降の包含層と思われる。

7層 7層からは、須恵器、土師器、円筒埴輪、弥生土器、石製品、鉄製品が出土している。8世紀末～9世紀前葉頃の須恵器が多く、そのなかに墨書き土器もみられる。また、11～12世紀前半頃の土師器の皿が出土し、この土器の時期が7層の下限である。古墳時代の遺物も上層に比べるとやや多く、前期から中期の高壺や円筒埴輪が出土している。円筒埴輪の出土位置、時期は、6層で出土したものと同じであり注目される。

8層 8層からは、土師器、弥生土器、石製品が出土している。須恵器は出土していないことから、古墳時代中期以前の包含層と考えられる。

NR02上層（10層） この土層からは、8層と同時期頃の土師器の高壺が出土している。

第2項 B区

4層 4層からは、土師器、須恵器が出土しているが、遺物量は少ない。中世前半頃の甕片や鉢があることから、中世前半以降の包含層と考えられる。

5、6層 5、6層からは、中世陶磁器、瓦質土器、須恵器、土師器が出土し、数量では土師器、須恵器が最も多くみられる。

器の破片が多い。須恵器は8～9世紀代のものが多く、7世紀代のものも1点みられる。他に、古墳時代後期頃の甕片や土師器の細片も多い。中世前半の陶磁器や瓦質土器、中世須恵器の甕片も出土していることから、5、6層の時期は中世前半以降の包含層と捉える。

8層 8層からは、弥生土器、土師器、須恵器、石製品が出土している。数量では、8世紀から9世紀代の須恵器が多い。土師器では古墳時代前期や中期の甕、弥生土器では中期後葉から後期の甕が出土している。8層は、古代、9世紀以降の包含層と思われる。

第3項 土層毎の遺物の様相（第20図）

前段では、調査区ごとに個別に報告したが、各層は水平に近い堆積であり、また、近接する調査区であることから、その土色や土質からA区、B区で同一の土層を抽出することが可能である。各層位の関係は、以下の通りである。但し、A、B区の5、6層については、現地調査段階で一括で取り上げているため、ここでもそのように取り扱った。

1層：A-1層=B-1層、II層：A-3層=B-3層、III層：

A-4層=B-4層、IV層：A-5・6層=B-5・6層、V層：A-7

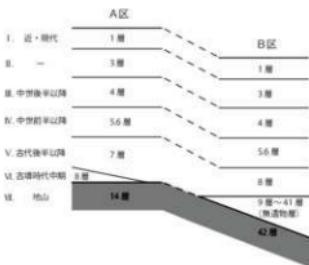
層=B-8層、VI層：A-8層（A区のみ）、VII層：A-14層=B-42層である。ここでは、遺物が出土したIII層～VI層について、2つの調査区から出土した遺物を一括してみていく。

1. III層 III層は、ほぼ水平堆積した灰色粘質土である。土層上面にあまり擾乱の痕跡はみられない。古墳時代前期から中世前半の遺物が出土し、出土量では須恵器片や土師器片が多い。中世前半の貿易陶磁器や瓦質土器、中世後半の青磁碗が出土していることから、中世後半以降の包含層と考えられる。B区では中世後半の遺物は出土していないが、A区4層と同一の土層と考えられ、B区4層も中世後半と捉える。

2. IV層 IV層も水平堆積した土層で、上面は凸凹し擾乱を受けているように見える。遺物は、弥生時代後半から中世前半の遺物が出土している。土師器、須恵器が多く、中世前半の遺物も出土しているがIII層に比べると少ない。中世前半の陶磁器や瓦質土器があり、中世前半以降の土層と捉える。また、A区では円筒埴輪が出土している。

3. V層 V層もほぼ水平に堆積した土層である。土層上面は凸凹しており、擾乱を受けている。遺物は、弥生時代中期後半から古代末、12世紀前半の遺物が出土している。III～VI層のなかで土師器、須恵器の数量は一番多く、古墳時代の土師器や弥生土器の割合も上層に比べると高い。また、この土層からも円筒埴輪が出土している。V層は、A区とB区で遺物の下限の時期はやや異なるが、概ね古代後半以降と捉えられる。

4. VI層 次に、A区にだけみられるVI層について簡単に触れておく。VI層はA区の北東側から中央付近にみられる土層で、上面は擾乱されている。弥生時代後期から古墳時代中期の土師器が出土し、須恵器がみられないことから、古墳時代中期以前の包含層である。



第2節 遺物と周辺の様相（第21図）

今回の調査では遺構は検出されず、出土した遺物は周辺丘陵から流れ込んだものと考えられた。このことから、本節では、各土層中に含まれる出土遺物の内容と時代観から、当該遺跡周辺丘陵部の様相について、近隣の遺跡やその調査例を参考にして時代ごとに推察してみたい。

本遺跡で最も古い遺物は、弥生時代中期後半から後期の甕片である。IV～VI層中でより新しい時代の遺物と混在して出土するものであるが、B区8層中に比較的集中し、摩滅小片以外にも大型片のもの（第19図-14）が含まれることから、この頃には、比較的近接した低丘陵部において人々の生活が行われていたと考えられる。

次に、古墳時代の遺物では、V、VI層を中心に高坏、甕、土製支脚等が出土している。時期的には前期から中期のものが多く、後期のものは少ない。甕や土製支脚の存在から、やはり近接する集落の存在が窺え、本遺跡の北側丘陵上の祖母畠遺跡を含め、一帯に当該期の集落が広がっている可能性が考えられる。また、古墳時代の特筆すべき遺物として、A区V、VI層から出土した円筒埴輪がある。他の遺物とは異なり南側にのみ集中して出土しており（第9図参照）、これはJ69古墳が所在する丘陵端部にあたることから、当該古墳群から転落したものと考えられる。なお、埴輪が出土した遺跡を本遺跡周辺の特田、川津地区でみると、朝釣川を挟む東西両側の低丘陵に多く確認される（第21図参照）。原の前遺跡から出土した円筒埴輪は、調整方法から古墳時代中期に位置付けられているが、本遺跡と同じく後期の埴輪が出土した遺跡は、金崎1号墳、菅田ヶ丘古墳、大源1号墳、貝崎6号墳等、数多く確認されている。このように後期の埴輪が出土した遺跡が多くみられることは、周辺に窯窓が存在する可能性も考えておきたい。なお、法吉地区にある塚山古墳（第3図参照）出土の埴輪は、本遺跡から出土した埴輪と胎土、色調、調整が似ており、同じ窯で焼かれた可能性が考えられる。

古代の遺物は、IV、V層中から、土師器では平安時代後半の坏、皿、須恵器は8～9世紀代の坏や高台坏皿、壺、甕類が出土している。遺物量からすると、当該時期のものが遺跡内で最も多く出土しており、周辺部での生活活動が最も盛行するものと考えられる。特に墨書き土器2点が出土したことは、識字層の存在を窺わせ、この時期に役所等の公的施設や寺院等が周辺に存在した可能性も想起させる。

中世の遺物は、III、IV層を中心と瓦質土器の鍋や須恵器の甕片、土師器の鉢、瓷器系陶器、貿易陶磁器が出土している。中世前半のものが多く、後半のものは試掘調査出土も併せて数点のみ出土している。調理具や貯蔵具のほかに、白磁の口禿げ皿や水



第21図 増輪出土遺跡分布図

差し、青白磁、盤といった一般的な集落ではみられないような遺物も出土している点は注目される。⁽⁵⁾

第3節 結語

今回の発掘調査では、弥生時代中期後半から中世後半の遺物が出土している。これら遺物の考察により、各時期において数量の多少はあるものの、鍋や鉢、甕、壺などの煮沸具や貯蔵具があることから、本遺跡周辺に生活域が存在することが想定でき、弥生時代から中世後半以降まで連続と続いていることが推察された。特に、8～9世紀代の遺物が最も多いことから、この時期にこれら集落が最も盛行するものと考えられた。また、この時期の墨書き器が出土したことは、近接して古代の公的施設等が存在した可能性も推測された。さらに、その後の中世の遺物の中にも、一般的な集落からは出土しないような貿易陶磁器が含まれることは、この時期においても有力者の居宅等の特異な施設が存在する可能性を想起させるものであった。

また、出土した円筒埴輪は、地形や出土状況から推察すると、隣接するJ69古墳から流れ込んだ遺物である可能性が高く、未調査ながら当該古墳の時期を5世紀末から6世紀前半に比定する資料となったことは注目される。

なお、これらの遺物を含む包含層は、各調査区の基本層序で述べたように、一部で土層境が乱れており、各土層中の遺物も時期幅が広いことから、当該土層とその下層とが攪拌されたものと推測できた。これについては、水田耕作の際の踏みしめ痕の可能性を考えているが、明確な水田に伴う遺構等は検出できず、また、嵩上げ造成を繰り返し、すべての面で水田が営まれていたのかも疑問が残る。今後の検証課題としたい。

以上、今回の調査によって、直接的に遺構は検出されなかったものの、遺物の検討から本遺跡周辺丘陵部における弥生時代から中世までの様相の一端を垣間見ることができた。このことは、川津、持田地区の歴史を考えるうえで有意義な資料を得られたものと評価できる。

【註】

- (1) 本書で報告する貿易陶磁器の編年については、「『大宰府条坊跡 XV・陶磁器分類編』」を参考にし、島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター 守岡正司氏にご教示頂いた。
- (2) 本書で報告する出雲国府編年の時期区分は以下のとおりである。

第 1 型式・・7世紀後葉	第 6 型式・・9世紀中葉～後葉
第 2 型式・・7世紀末葉～8世紀第1四半期	第 7 型式・・10世紀前半
第 3 型式・・8世紀第2四半期	第 8 型式・・10世紀後半～11世紀前半
第 4 型式・・8世紀第3四半期～第4四半期	第 9 型式・・11世紀後半～12世紀前半
第 5 型式・・8世紀末葉～9世紀前葉	第 10 型式・・12世紀後半
- (3) 本書で報告するA区から出土した墨書き器については、「東京大学人間文化系研究科・文学部 教授 佐藤信氏、島根県立古代文化センター 専門研究員 平石充氏、吉松大志氏にご教示を頂いた。敢えて読めば、上の字は「塗」の他に「夜」の可能性はあるが低い。下の字も敢えて読めば、「廿」(20)と読めるかもしれない。とのご教示を得ている。」
- (4) ラミナ層は湿地の堆積土層で、有機質の堆積と氾濫等による粘質土の堆積が互層状にみられる。松江城下町遺跡の発掘調査においても確認されている。南田町132外の調査では、ラミナ層の粘質土部分は一層でも堆積することがあり、有機物を含む部分は粘質土より時間をかけて溜まっていき、また粘質土が堆積するという繰り返しだある。有機物を含む土層の堆積時間はわからないが、ラミナ層の1層が一雨だとすると、それほど長い時間をかけて堆積したものではない、とのご指導を受けた。それを参考にするならば、本遺跡のラミナ層の厚さは25cm程度であり、25年以上、何十年程度の堆積と推測される。
- (5) 守岡正司氏のご教示による。青白磁や盤、白磁の水差しは、一般的な集落から出土するような遺物ではなく、松江市の出雲国府跡の宮の後地区や、浜田市の古市遺跡の調査で出土している。古市遺跡では中世の遺構が検出され、貿易陶磁器が出土している。また、8世紀後半頃の須恵器や、9世紀から10世紀頃の縁袖陶器の他、越州窯青磁も出土し、古代から中世にかけて遺構が継続していたと考えられ、それは単なる古代集落とは考えられていない。このようなことから、「本遺跡の出土遺物も古市遺跡と同じような状況であり、一般的な集落ではないイメージを受ける。」との指摘を受けた。

【参考文献】

島根県教育委員会 1995 『原の前遺跡』

土 器

遺物番号	区	出土位置	出土土層	断面	断面	延長 (cm)			調査・手法の特徴・文様	色調	備考	
						口径	通徑	底径				
5.1	T.5	A4	灰白色質土	直縁	圓	-	5.3	(4.0)	内: 直縁・印文花、底部丸み付外 外: 地紋・植物文	内: 明褐色～暗褐色 外: 暗褐色	古墳時代 (15世紀後半～16世紀前半)	
5.2	T.5	A4	灰白色粘質土	直縁	圓	-	5.8	(3.9)	内: 直縁、底部丸み付花文	内: オーバーアイド 外: オーバーアイド	古墳時代 (16世紀後半～17世紀前半)	
5.3	T.1	-	灰白色粘質土	直縁	圓	(18.2)	-	12.05	内: 圆筒形ナデ 外: 地紋ナデ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	古墳時代中期～5型式	
5.4	T.5	A4	灰白色粘質土	直縁	井	(12.8)	-	(3.4)	内: 極浅 外: 武文、浅腹	内: 暗褐色 外: 暗褐色	古墳時代中期～5型式	
5.5	T.5	A4	灰白色粘質土	直縁	直	-	5.45	(3.0)	内: ナデ、直縁直腹 外: 地紋	内: 暗褐色 外: オーバーアイド	古墳時代中期～5型式	
5.6	T.3	E3	灰白色粘質土	直縁	直	-	5.6	(3.0)	内: 圆筒形ナデ 外: 地紋ナデ、底部丸み付	内: 明褐色 外: 明褐色	古墳時代中期～5型式	
5.7	T.5	A4	灰白色粘質土	直縁	直	(12.4)	-	(3.0)	内: 極浅 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	古墳時代中期～5型式	
5.8	A.5K	B4	4 級	直縁	直	-	(7.0)	(3.0)	内: 圆筒形ナデ 外: 地紋、底部の腹は僅に立っている	内: 暗褐色 外: 暗褐色	古墳時代 (13世紀後半～14世紀前半)	
10.2	A.5K	B4	4 級	直縁	直	新規直系 新規直	(14.0)	-	(3.0)	内: 圆筒形ナデ 外: 地紋、植物文	内: 明褐色 外: 明褐色	古墳時代 (14世紀後半～15世紀前半)
10.3	A.5K	D3	4 級	直口縁	-	-	-	(2.6)	内: 圆筒形ナデ 外: 地紋	内: 白色 外: 白色	中国製	
10.4	A.5K	B4	4 級	直縁	直	-	(14.2)	(3.5)	内: 圆筒形 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	古墳時代中期～5型式	
10.5	A.5K	-	4 級	直縁	直	玉川茶碗	-	(3.0)	内: 圆筒形 (大口部) 外: 地紋 (大口部)、下平は墨跡	内: 黑色 外: 黑色	中国製、口内が墨で 書かれていた。墨跡は 薄くなる。	
10.6	A.5K	C3	4 級	直縁	直	新規直系 新規直	-	(3.5)	内: 圆筒形 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	中国製、中型前半	
10.7	A.5K	A4	4 級	直縁	直	新規直の直	-	(3.5)	内: 圆筒形 外: 地紋	内: 白色 外: 白色	中国製、E2～14世紀	
10.8	A.5K	B4	4 級	直縁	二重脚	-	(3.0)	(3.0)	内: 圆筒形 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	中国製、中型前半	
10.9	A.5K	B4	4 級	直口上縁	直	(7.0)	-	(3.0)	内: 圆筒形ナデ、ハラメ 外: 地紋ナデ、ナデ、底部直	内: 暗褐色 外: 暗褐色	新規直 中国製前半 (13世紀)	
10.10	A.5K	B4	4 級	直口上縁 口内、底部直	直	-	(3.0)	(3.0)	内: 圆筒形ナデ 外: 地紋ナデ、底部丸み付ナデ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	中国製、中型前半	
10.11	A.5K	B4	4 級	直縁	直	-	(3.0)	(3.0)	内: ハラメ 外: 植物のタキシキ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	直口縁 中国製前半	
10.12	A.5K	B4	4 級	直縁	直	-	(3.0)	(3.0)	内: 地紋 外: 植物のタキシキ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	直口縁 中国製前半	
10.13	A.5K	C4	4 級	直縁	直	吉野村村 吉野村	-	(3.5)	内: 圆筒形ナデ、ハラメ 外: 地紋ナデ、ナデ、底部丸み付	内: 暗褐色 外: 暗褐色	古墳時代中期～5型式	
10.14	A.5K	-	4 級	直縁	直	吉野村村 吉野村	-	(3.0)	内: 圆筒形ナデ 外: 地紋ナデ、ナデ、底部丸み付	内: 暗褐色 外: 暗褐色	古墳時代中期～5型式	
10.15	A.5K	-	4 級	直縁	直	吉野村	-	(3.0)	内: 圆筒形ナデ 外: 地紋ナデ、ナデ、底部丸み付	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村 吉野村	
10.16	A.5K	C3	4 級	直縁	直	吉野村	-	(3.0)	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半 (13～14世紀)	
10.17	A.5K	-	4 級	直縁	井	-	5.6	(2.4)	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
10.18	A.5K	B4	4 級	直縁	直	-	(5.6)	(3.0)	内: ナデ 外: ココナ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	直口縁 吉野村前半	
10.19	A.5K	C4	4 級	直縁	高杯	-	(2.0)	(2.0)	内: 地紋 外: 植物のタキシキ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
11.1	A.5K	C3	6 級	直縁	直	-	(4.2)	(4.2)	内: ハラメ 外: 植物のタキシキ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
11.2	A.5K	D3	6 級	直縁	直	吉野村村 吉野村	-	(7.0)	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半 (3～5型式)	
11.3	A.5K	D3	6 級	直縁	直	吉野村	-	(3.0)	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
11.4	A.5K	C4	6 級	直縁	直	吉野村村 吉野村	-	(6.0)	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
11.5	A.5K	D3	6 級	直縁	直	吉野村村 吉野村	-	(7.0)	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
11.6	A.5K	C3	6 級	直縁	直	吉野村村 吉野村	-	(10.0)	内: 極浅 外: ナデ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
11.7	A.5K	C4	6 級	直縁	直	-	-	(3.0)	内: ナデ 外: ココナ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
11.8	A.5K	B4	5 級	直縁	高杯	-	(2.7)	(2.7)	内: 極浅 外: ナデ	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半～中期	
11.9	A.5K	B4	6 級	直口上縁	直	-	-	(2.7)	内: ナデ 外: 植物文	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半～中期	
12.1	A.5K	B4	7 級	直縁	直	吉野村 吉野村	(5.0)	3.2	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
12.2	A.5K	E3	7 級	直縁	直	吉野村村 吉野村	(2.0)	(3.0)	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
12.3	A.5K	C3	7 級	直縁	直	吉野村 吉野村	14.4	9.8	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半～中期	
12.4	A.5K	E3	7 級	直縁	直	吉野村 吉野村	-	(7.0)	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	
12.5	A.5K	E3	7 級	直縁	直	吉野村 吉野村	(14.5)	-	内: 地紋ナデ 外: 地紋	内: 暗褐色 外: 暗褐色	吉野村前半	

土器

遺物番号	区	出土位置	高さ(㎜)	幅(㎜)	面種	法量(㎝)			調査・手造の特徴・文様	色調	備考
						口径	底径	高さ			
12-6	A区	C4	丁度	直筒	直坪	-	-	(8.2)	内:1段ナガ 外:2段ナガ	内:黄褐色 外:灰褐色	古墳時代後半 古墳時代後半
12-7	A区	B4	丁度	上傾斜	直坪	-	-	(3.9)	内:1段ナガ 外:2段ナガ	内:深褐色 外:深褐色	古墳時代後半～9型式
12-8	A区	B4	丁度	上傾斜	直坪	-	-	(5.6)	内:1段ナガ 外:2段ナガ	内:暗色 外:土色・淡褐色	古墳時代後半～9型式
12-9	A区	B4	丁度	上傾斜	直坪	-	-	(2.5)	内:ハラツ 外:ハラツ	内:深褐色 外:褐色	古墳時代前半～中期
12-10	A区	B4	丁度	上傾斜	直坪	-	-	(4.0)	内:ナガ、ハラツギリ、斜り縁 外:ハラツ	内:深褐色 外:深褐色～相模原色	古墳時代前半～中期
12-11	A区	B4	丁度	上傾斜	直坪	-	-	(3.6)	内:丸形 外:丸形	内:土色・淡褐色 外:土色・淡褐色	古墳時代前半～中期
12-12	A区	B4	丁度	上傾斜	直坪	-	-	(5.0)	内:ハラツギリ、瓦面、直筒、直筒 外:無	内:灰褐色～明赤褐色 外:灰褐色～明赤褐色	古墳時代後半～中期
12-13	A区	D3	丁度	直方土器	直	(28.0)	-	-	内:コロナガ、ハラツギリ、直筒 外:コロナガ、輪形縫合	内:土色・淡褐色 外:土色・淡褐色	本編第V-2様式
13-1	A区	B4	8度	上傾斜	直	(13.2)	-	-	内:ナガ、ハラツギリ	内:浅褐色 外:淡褐色	本編第V-2様式
13-2	A区	B4	8度	上傾斜	直	(17.4)	-	-	内:ナガ 外:丸形	内:土色・淡褐色 外:土色・淡褐色	古墳時代小形
13-3	A区	B4	8度	上傾斜	直坪	-	-	(11.0)	内:直筒、斜り縁 外:直筒、わずかにハラツがみられる	内:オーバー色 外:オーバー色	古墳時代後半～中期
13-4	A区	B4	8度	上傾斜	直坪	-	-	(6.0)	内:ハラツギリ、直筒	内:土色・淡褐色	古墳時代後半～中期
13-5	A区	B4	8度	布矢土器	直	-	-	(3.4)	内:ナガ、ハラツギリ 外:無	内:土色・淡褐色 外:淡褐色	本編第V-1様式
13-6	A区	B4	8度	布矢土器	直	(12.2)	-	-	内:ナガ、ハラツギリ 外:ナガ、輪形縫合	内:黑色 外:深褐色	本編第V-1様式 運行者
14-1	A区	E3	NB02-2(横)(10度)	上傾斜	直坪	-	-	(2.9)	内:直筒	内:灰褐色	古墳時代後半～中期
14-2	A区	C3	NB02-2(横)(10度)	上傾斜	直坪	-	-	(7.0)	内:直筒、ハラツがすこしみられる 外:直筒、ハラツがすこしみられる	内:土色・淡褐色 外:土色・淡褐色	古墳時代後半～中期
17-1	B区	E10	4度	中腰直筒	直	-	-	(6.0)	内:1段ナガ	内:黑色 外:淡褐色	伊豫原
17-2	B区	E10	4度	上傾斜	圓か鉢	(23.0)	-	-	内:ナガ、ハラツ 外:ナガ、輪形縫合	内:淡褐色 外:淡褐色	伊豫原の下 運行者
18-1	B区	F10	6度	直筒系陶器	直・横	-	-	(5.0)	内:ナガ 外:ナガ、ラクタ縫	内:黑色 外:淡褐色	13～14世紀
18-2	B区	E10	6度	直筒	直筒陶器の部	(10.2)	-	-	内:直筒 外:直筒	内:黑色 外:淡褐色	伊豫原
18-3	B区	E10	6度	直筒	直筒系 直筒	-	(3.6)	-	内:直筒 外:直筒の端に窓がある	内:オーバー色 外:オーバー色	伊豫原 本編第V-1様式
18-4	B区	F10	6度	直筒土器	直	(32.0)	-	-	内:直筒の窓のある直筒 外:ナガ、コロナガ	内:黑色 外:黑色	伊豫原の下 運行者
18-5	B区	E10	6度	直筒	直	-	-	(4.0)	内:コロナガ 外:コロナガの窓がある	内:黑色 外:黑色	伊豫原
18-6	B区	F10	6度	直筒	直筒合併	-	(7.0)	(1.0)	内:1段ナガ 外:1段ナガ、輪形縫合	内:黑色 外:黑色	本編第V-3～5型式
18-7	B区	F9	5度	直筒	直	(14.2)	-	(1.9)	内:1段ナガ、直筒ナガ 外:1段ナガ、直筒ナガ	内:黑色 外:黑色	本編第V-3～4型式
18-8	B区	E10	6度	直筒	直	-	-	(0.5)	内:直筒ナガ、ハラツギリ、直筒 外:直筒ナガ、直筒、沈没	内:黑色 外:黑色	古墳時代早～古墳手
19-1	B区	E10	8度	直筒	直筒合併	-	(10.0)	(3.7)	内:1段ナガ 外:1段ナガ、輪形縫合	内:黑色 外:黑色	本編第V-6～7型式
19-2	B区	F10	8度	直筒	直筒合併	(11.4)	(0.2)	(4.0)	内:1段ナガ、直筒ナガ 外:1段ナガ、直筒	内:黑色 外:黑色	本編第V-5～6型式
19-3	B区	F9	8度	直筒	直	(12.2)	-	(10.0)	内:1段ナガ 外:1段ナガ	内:黑色 外:黑色	本編第V-5～6型式
19-4	B区	F10	8度	直筒	直筒合併	(17.4)	(3.1)	(3.7)	内:1段ナガ、直筒 外:1段ナガ、輪形縫合	内:黑色 外:黑色	本編第V-4～5型式
19-5	B区	E10	8度	直筒	直筒合併	(20.2)	-	(2.7)	内:1段ナガ 外:1段ナガ、輪形縫合	内:黑色 外:黑色	本編第V-4～5型式
19-6	B区	F10	8度	直筒	直筒合併	(16.3)	(3.1)	(3.45)	内:1段ナガ、直筒ナガ 外:1段ナガ、直筒	内:黑色 外:黑色	本編第V-4～5型式 外:直筒の端に窓
19-7	B区	E10	8度	直筒	直	(17.4)	-	(1.4)	内:1段ナガ 外:1段ナガ	内:黑色 外:黑色	本編第V-1型式
19-8	B区	F9	8度	直筒	直	-	-	(0.05)	内:コロナガ 外:コロナガ、輪形縫合	内:黑色 外:黑色	本編第V-1型式
19-9	B区	E10	8度	上傾斜	直	(14.2)	(3.0)	-	内:直筒 外:直筒	内:淡褐色 外:淡褐色	古墳時代後半 古墳時代後半
19-10	B区	E10	8度	上傾斜	直	(22.4)	-	(0.7)	内:コロナガ、ハケ目、へつ裂目、輪形縫合 外:コロナガ	内:淡褐色 外:淡褐色	古墳時代後半
19-11	B区	F10	9個以上	布矢土器	直	(17.4)	-	(2.7)	内:直筒 外:直筒	内:淡褐色 外:淡褐色	本編第V-2様式
19-12	B区	E10	9度	布矢土器	直	(14.0)	-	(2.0)	内:直筒 外:直筒	内:明褐色 外:明褐色	本編第V-1様式
19-13	B区	E10	9度	布矢土器	直	(21.2)	-	(2.4)	内:直筒 外:直筒	内:明褐色 外:明褐色	本編第V-1様式
19-14	B区	F10	9個以上	布矢土器	直	(21.2)	-	(0.95)	内:コロナガ、ハラツ 外:コロナガ、ハラツ、輪形縫合	内:淡褐色～オリーブ褐色 外:淡褐色～黑色	本編第V-2様式
19-15	B区	CD	9度	布矢土器	直筒	-	-	(2.0)	内:直筒 外:直筒	内:淡褐色 外:淡褐色	本編第V-1様式

埴輪

遺物番号	区	出土状況	出土土解	種類	法量(cm)			調査・手法の特徴・文様	色調	備考
					最大長	又寸法	幅			
11-10	A区	E3	6層	円筒埴輪	(28.0)	0.6	(4.2)	内:ナガ 外:ヨコナギ、縦中斜め内凹のハサ目	内:青緑 外:浅黄褐色	円内偏左V斜め縫(TK43～47段)(附)
11-11	A区	E3	6層	円筒埴輪	(26.2)	0.6	(5.7)	内:ナガ 外:ヨコナギ、直心丸窓	内:浅黄褐色 外:浅黄褐色	円内偏左V斜め縫(TK43～47段)(附) 円形の通孔
11-12	A区	E3	6層	箱型埴輪	—	—	(5.2)	内:ナガ 外:横へヶ月	内:青緑色 外:浅黄褐色	箱型埴輪(内側はか 夕方が斜めに在る通孔)
12-14	A区	E3	7層	円筒埴輪	(28.0)	0.5	(5.2)	内:ナガ 外:ヨコナギ、縦中斜め内凹のハサ目	内:浅黄褐色 外:浅黄褐色	円内偏左V斜め縫(TK43～47段)(附)
12-15	A区	E3	7層	円筒埴輪	(22.6)	0.6	(7.8)	内:ナガ 外:ヨコナギ、直心丸窓	内:青緑色 外:浅黄褐色	円内偏左V斜め縫(TK43～47段)(附) 円形の通孔

石製品

遺物番号	区	出土状況	出土土解	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
					最大長	最大幅	最小幅		
12-16	A区	B4	7層	石器	6.25	4.0	1.9	49.59	加工面、擦痕あり
13-7	A区	B4	8層	砾石	3.0	3.5	2.5	46.59	碧玉あり
13-16	B区	C3	8層	黑曜石 石核	4.5	3.2	1.5	2002	

鉄製品

遺物番号	区	出土状況	出土土解	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
					最大長	最大幅	最小幅		
12-17	A区	—	7層	鉄矢	5.4	1.5	0.8	14.55	

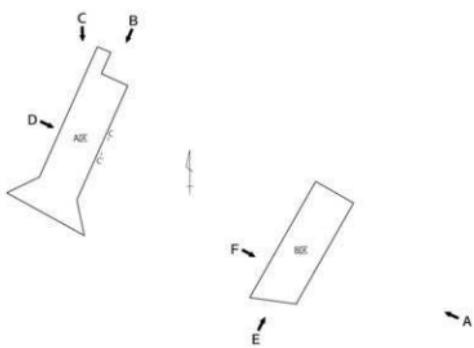
銭貨

遺物番号	区	出土状況	出土土解	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
					直径	孔径	最大厚		
11-13	A区	E3	8層	天保年元 (延喜式)	2.5	0.7	0.1	2.80	鋳造年 1017年

木製品

遺物番号	区	出土状況	出土土解	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
					最大長	最大幅	最小幅		
11-14	A区	B4	5層	漆刷	1.05 (4.2)	0.35 (4.2)	—	—	背面に草花文
11-15	A区	B4	6層	平頭足	1.06	3.5	2.1	—	
11-16	A区	C4	6層	下駒	(13.8)	14.0	1.9	—	背面み下駒、一部剥げている
11-17	A区	C4	6層	板状木製品	25.5	4.2	1.2	—	古御年の札

写 真 図 版



調査区完掘後写真 撮影方向A～F (図版1～3)



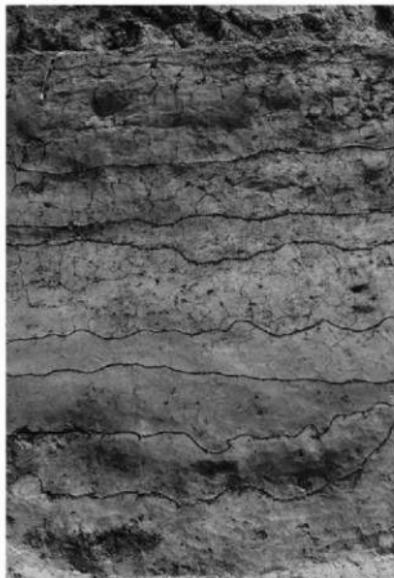
柏木遺跡調査前近景 撮影方向 A



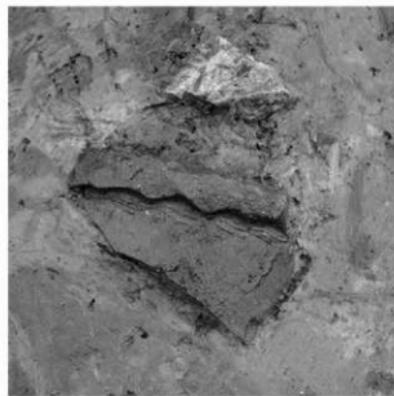
A 区完掘状況（北東から） 撮影方向 B



A 区東壁土層断面（北西から） 撮影方向 C



A 区東壁土層断面 C-C' (北西から) 撮影方向 D



A 区遺物出土状況 (埴輪)



B 区完掘状況（南西から） 撮影方向 E

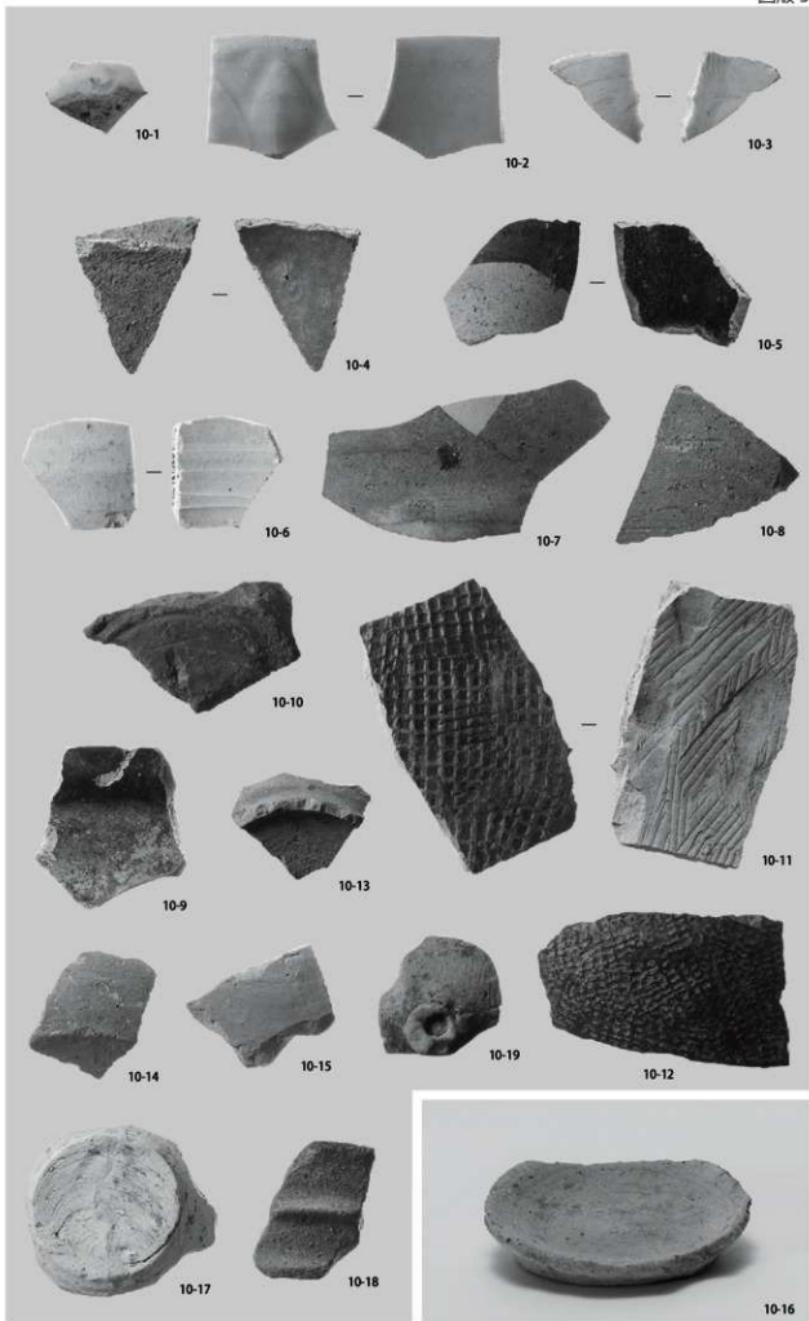


B 区サブトレ①・②土層断面（北西から） 撮影方向 F

図版 4

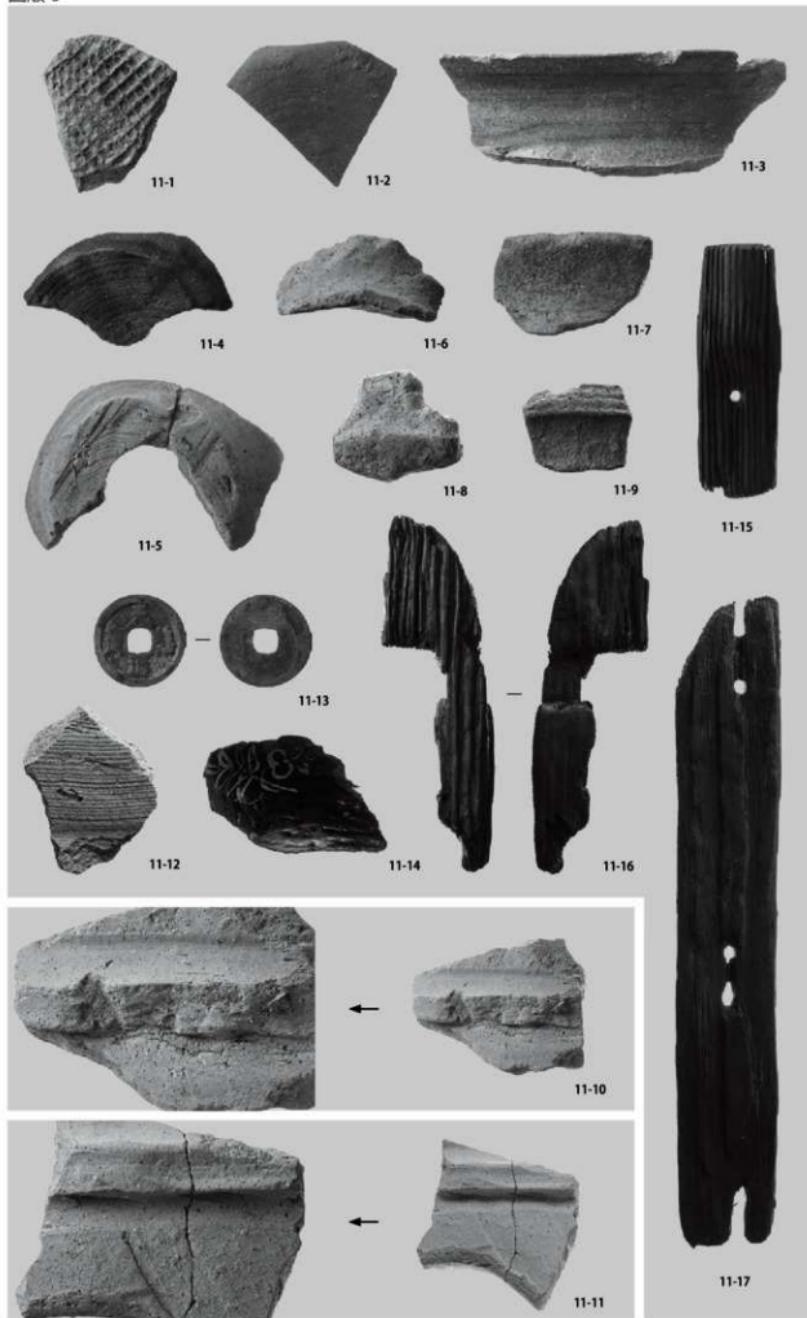


試掘調査出土遺物

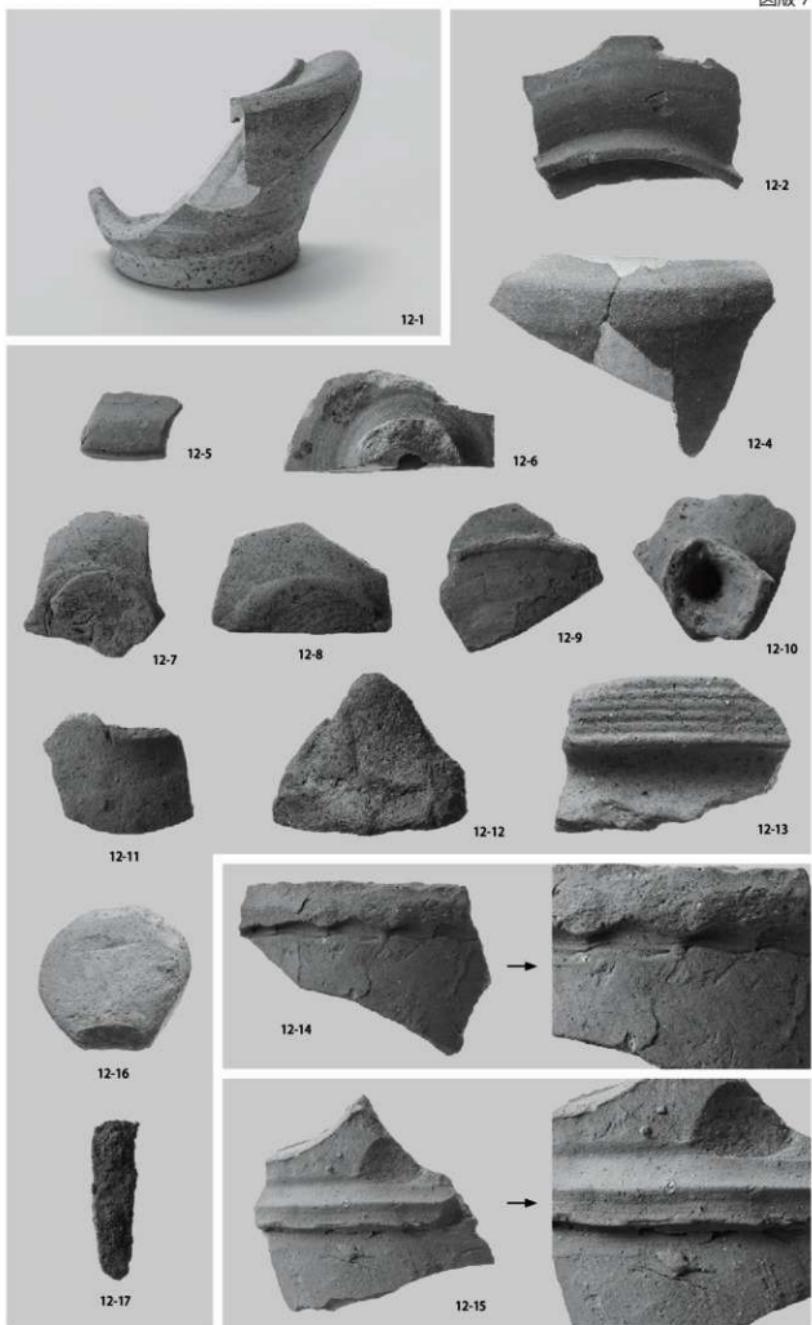


A 区 4 層出土遺物

図版 6

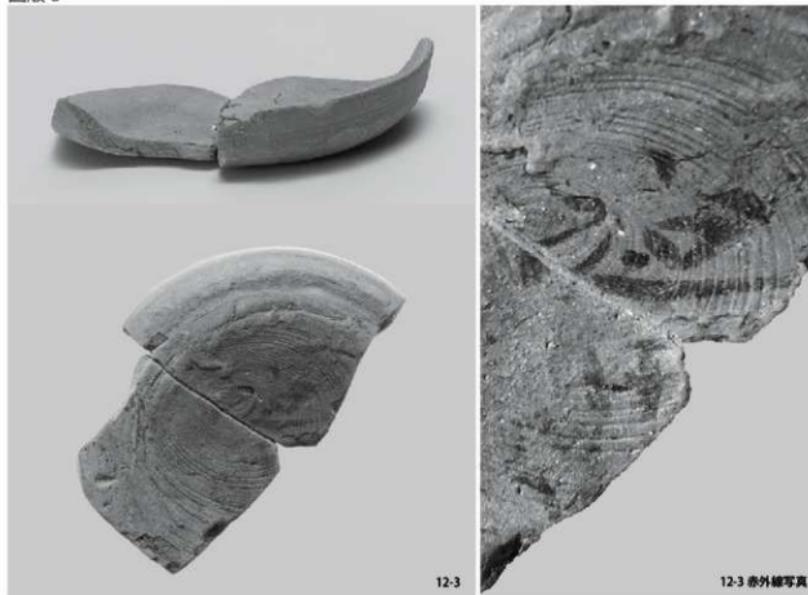


A 区 5・6 層出土遺物

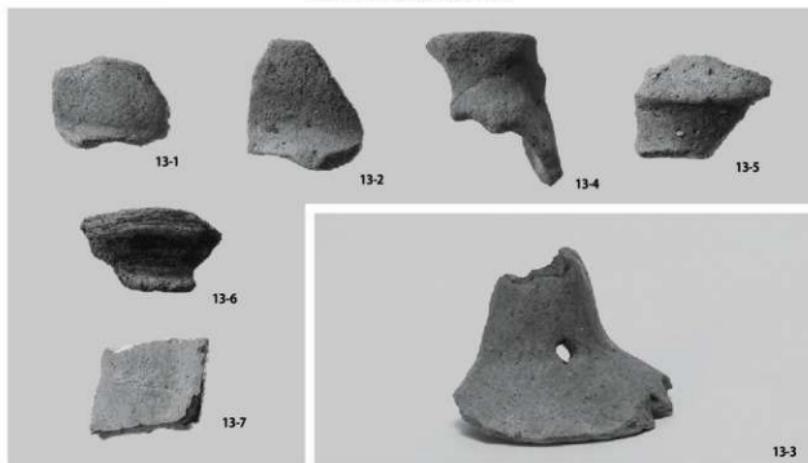


A区 7層出土遺物

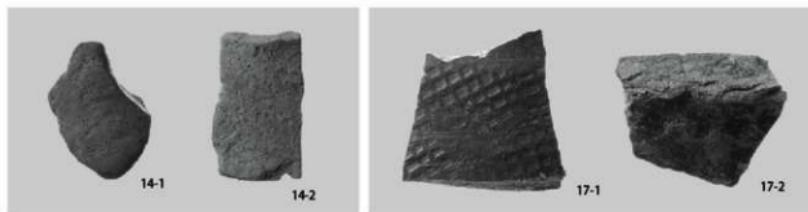
図版8



A区7層出土遺物（墨書き土器）

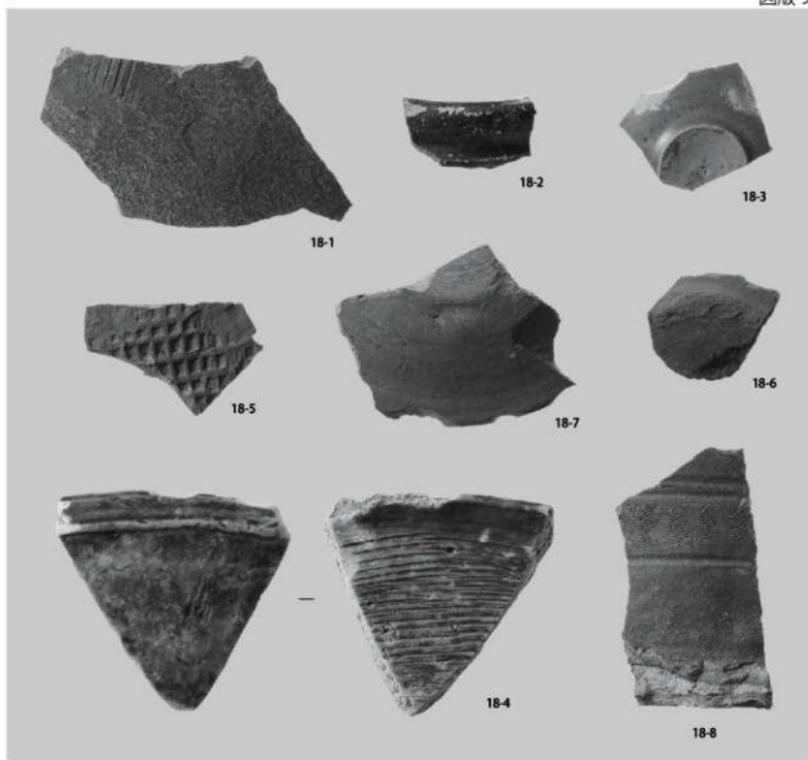


A区8層出土遺物

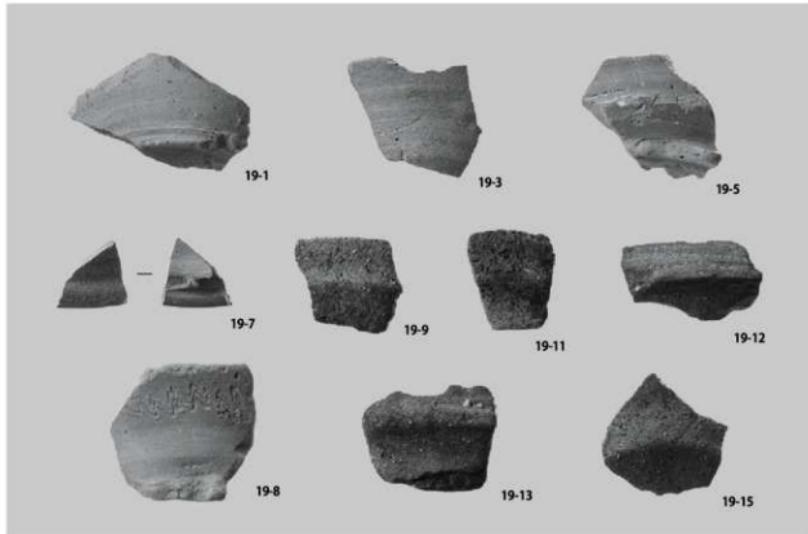


A区NR02上層（10層）出土遺物

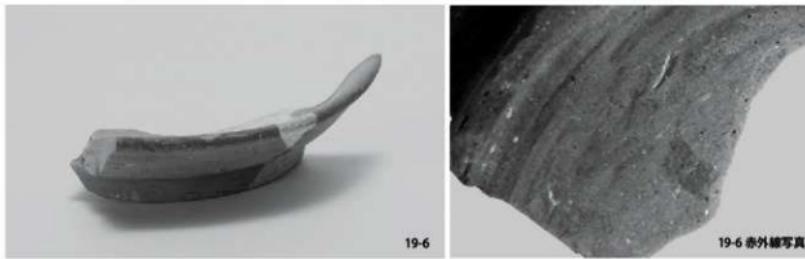
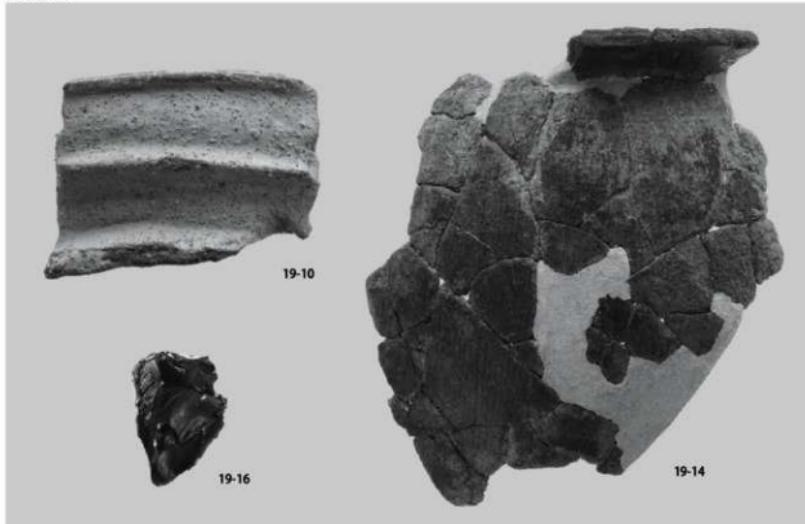
B区4層出土遺物



B 区 5・6 層出土遺物



B 区 8 層出土遺物①



B 区 8 層出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	かしわぎいせき						
書名	柏木遺跡						
副書名	アークタウン西持田敷地造成工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第180集						
編著者名	廣濱貴子 徳永隆						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町 86 番地 TEL: 0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団(埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月日	2017年8月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
柏木遺跡	島根県松江市西持田町 字柏木 105 番-1	32201	D-1119	35° 29' 41"	20170308 ～ 20170424	246.5m ²	敷地 造成工事
				133° 04' 14"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
柏木遺跡	散布地	弥生時代 ～ 中世	一	須恵器 土師器 瓦質土器 中世陶磁器 円筒埴輪 錢貨 石製品 金属製品	遺物包含層から、弥生土器や土師器、須恵器、円筒埴輪、中世陶磁器等が出土した。出土遺物から、周辺に住居の存在が考えられ、8～9世紀代においては集落が形成されていたと推測された。また、土層の擾乱から、耕作の可能性が窺われた。		

松江市文化財調査報告書 第180集
アークタウン西持田敷地造成工事に伴う発掘調査報告書

柏木遺跡

平成29(2017)年8月

発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印刷 松栄印刷有限会社
島根県松江市西川津町 667-1
